

第14回全国バス学習研究集会

(小、中、高校)

提 案 要 項

- 期 日** 昭和54年11月21日・22日
- 会 場** 姫路市立白鷺中学校
姫路市立城南小学校
姫路市立教育研究所・視聴覚センター
- 主 催** 全国バス学習研究連絡会
姫路市立白鷺中学校
- 共 催** 姫路市教育委員会
姫路市立城南小学校
中播バス学習研究会
姫路市立白鷺中学校P T A
- 後 援** 兵庫県教育委員会
全日本特殊教育研究連盟
全国公立学校難聴言語障害教育研究協議会
松下視聴覚教育研究財団

子どもの力が生きるバズ学習

——子どもの考え方を追って——

滋賀県神崎郡五個荘小学校

石部 清和

1 テーマによせて

子どもたちの主体性・創造性を尊び、子ども自身の持ちあじを發揮させることを願って、人間と人間の接触交流を積極的に行い、心琴線にふれる質の高い効果的なバズ学習を期待している。本校は過去10年余り、人間形成をめざすバズ学習のあり方と取り組みその研究をおし進めてきた。さらに、子どもを十分理解し、子どもの可能性を十分發揮し、その力が授業の中で生きて働く力強い学習となることを願って、バズ学習による授業分析研究を行うものである。

そこで、2年生のバズ学習の授業を例に個人思考から全体思考、さらには評価活動とそれぞれの学習過程の中で、子どもの追求過程をさぐりながら考察したいと考える。取り扱う単元は社会科の「工場ではたらく人びと」である。

2 子どもの力が生きる場を求めて

(1) 子ども理解を深めることから

子どもの可能性を發揮すべく最善の努力をつくすことは教師に課せられた当然のつとめである。そのためには、まず子どもを知ることであり、日常生活の中における行動から性格を知り授業の活動状態から思考活動のようすを知るが、最も大切なことは、今取り扱おうとしている教材に対する個々の子どもの実態をとらえることである。

そこで、学級の子どもの実態を個人別に記録すると共に「工場ではたらく人びと」のプリテスを行い、その結果をもとに指導計画を修正して指導するものである。

2年生の子どもは、まだまだ自己中心的な行動が多いが、反面自分なりに自立していこうとする強い活動力に満ちている。したがって何事も感覚的に直視してしまうことが多く価値判断も不安であるが、かえって個性的なひらめきを見せることがある。このような子どもの特殊性を生かし、自分の手で触れ、目で確かめさせながら、発見することや創造することの喜びを味わわせて、価値を感得させつつ学ばせたいと考える。

(2) 目標の具体化

- 認知的目標 原料からまったくちがった製品をつくるのが工場の仕事であり、そこで働く人のようすから、よい製品を多量に作る努力のようすを多面的にとらえる。
- 態度的目標 A おいしいパンをつくるようすを実際に見て、くわしく調べようとする。
B 友だちの考えにつけたして、考えをふくらまそう。

子どもたちは、学習目標に到達するための具体的な学習は、それを組織的に組み立てられた課題である。さらにその課題を子どもに即して具体的な取り組みをわからせながら学習させなければならない。ここでは「パン工ばでは、よいパンをたくさん作るために、どんな仕事をどのように工夫しているのか」と具体的な目あてに位置づけ、このために「パン工場の絵話作り」をしようと、文字説明の不足を絵でおぎなうためにも方向づけていたのである。

(3) 学習に生きる課題づくり

学習計画は、教師の指導計画をプリテスト後に子どもと協議しながら修正し、11時間の計画と見通しを持たせたのである。ただ低学年では、全単元を一挙に見通すことは困難であり、工場見学前と見学後に分けて課題づくりを行ったが、見学前には、工場見学によって後、何を学ぶかの目標は共通化しておいたのである。

プリテスト 問題別・班別 得点・平均

班 (4人)	問題別								グループ平均
	1 パンの原料	2 パン作りの仕事	3 機械	4 人手のいる仕事	5 ベルトコンベアー	6 仕事の分担	7 労働条件	8 労働条件	
1	2	16	0	0	0	9	1	17	45
2	1	18	2	0	0	16	4	12	53
3	3	10	1	0	0	4	1	15	34
4	2	17	0	0	0	9	2	20	50
5	1.3	16	0	0	0	8	2.7	20	48
6	0	18.7	0	0	0	9.3	0	16	44
7	1	14	0	0	0	7	2	17	41
8	0	16	0	0	0	6	1	20	43
9	3	14	5	0	1	11	3	15	52
10	2	14	1	1	0	4	1	19	42
11	0	13	1	0	0	7	2	10	44

このプリテストの結果のように、子どもの潜在知識は少なく、学級平均得点45.2点である。また問題項目別に見ても、機械や工場のしくみ、人手による仕事などの知識はなく、無解答者も多い。したがってこのような内容には、特に重要視しなければならない。

一方機械については、特に子どもの関心が強く、「どうするとパンができるのか」等については、家庭で聞き入ってくる子どももいた。

教師は、授業前にまず指導計画を立案するが、この計画が子どもの実態にどれだけ順応している

かが問題である。つまり授業前における教材に対する子どもの実態を質的・量的にとらえ、課題構成を再度見なおし、子どもはこのプリテストの結果を道しるべに学習の見通しについて協議し、目標達成のための過程に、何を、どう解決していくのかを明確にするものである。

このような学習目標達成のための学習計画作りや、学習の見通しをもつこと自体に学習への意欲性を誘発する基点があり、加えて色々な情報をもとに学習内容や方法が明確にされ、追求視点がわかってくれば、生きた学習課題として生まれ変わるのである。

(見学前の子どもの意識と課題とのつながり)

- 。ざいりょうには、どんなものをつかうか (4人)
- 。メリケン粉と、ほかになにをつかうか (5人)
- 。クリームやあんこは、どこでかうのか (5人)
- 。ざいりょうはどこでしいれるのか (4人)
- 。一どにどれだけやくのか (14人)
- 。どんな形のパンが早くやけるか (2人)
- 。どんななかまでやくのか (3人)
- 。どうしていくとパンができるか (6人)
- 。どんな仕ごがあるか (3人)
- 。どんなにしてパンの形にするのか (2人)
- 。パンの形はいくつあるか (5人)
- 。パンの重さはみな同じか (3人)
- 。はたらいている人は、どんなふうそうをしているのか (3人)
- 。どんなきかいをつかっているか (3人)
- 。パンをよごさない工夫はどうしているか (5人)
- 。休み時間はどれだけあるか (2人)
- 。なん時ごろはいたつして、いつかえるのか (3人)

(全体協議できめた見学視点)

- 。なん時におきて、なん時にしごとをやめて、なん時にねるか (2人)
- ① どんなざいりょうをつかうか
- ② どんなつくりかたをするのか
- ③ どんなきかいをつかうか
- ④ やく時間はどれだけかかるか
- ⑤ どんなふうでするか
- ⑥ なん時におきて、なん時にねるか
- ⑦ ごはんはなん時に食べるか
- ⑧ 休み時間はどれだけあるか
- ⑨ いたつはなん時頃行くか、かえりはいつか
- ⑩ どんなパンがよくられるか
- ⑪ ざいりょうはどこからしいれるか
- ⑫ パンの重さはみな同じか
- ⑬ どんな形のパンがあるか
- ⑭ よごれたり、くさったりしない工夫はどうしているか (3人)
- 。ごはんはなん時に食べて、交たいするのか (3人)

(見通しとしてもった学習課題)

- ① パン作りにはどんなしごとや、きかいがあるか
- ② たくさんのパンが作れるわけを考える
- ③ たくさんうるために、どんなふうをしているか考える
- ④ パン工場でも時間わりがきまっているわけを考える
- ⑤ パン作りの絵話をつくり発表する
- ⑥ べんきょうのはんせいやまとめをする

(4) 課題意識の強化

子どもたちが本時の学習で何を解決するかを知って学習を進めることは、学習を積極的に取り組む大へんな要因である。しかし、ここに解決しようという働きかけが主体的になされなければならない。そのためには全員が同じ目あてに向って共通理解した上で、自分とのかかわりにおいて取り組むことのできる援助や指導がなされなければならない。

○ 子どもの工場見学の見学

子どもたちは、見学前の授業において「見学の目あてをきめよう」という課題提示の段階で、「見たいもの」から「見なければならないもの」に気づいて、「たずねること」「考えついたこと」の3項に分けて考え合おうと、追究視点を明確にしている。このことは、すでに述べたように、学習の取り組み方の情報を交わし、課題解決への手がかりを熟してから学習行為を行うため、学級のだれもが参加できる事実である。

(5) 態度目標の位置づけ

授業が成立するには、課題が全員の共通意識のもとに集団的目標として、それに立ち向う、個人的な努力が独立的にまずなされなければならない。このような態度の形成については2つの面から考える。その1つは、教材内容から認知的目標に向うための目標(A)と、他の1つは、相互活動を高めるための態度(B)を授業に位置づけ、学習の流れの中で同時に達成しようとするものである。

態度目標(B)の基本的な柱として、低学年では授業が楽しいと感じて、学習に参加する姿勢を大切にしながら、やがてひとり立ちで主体的に学習しようとする態度の変容を期待し、どの子どもでもできるという自信を体験させつつ「話すこと」「聞くこと」の基本的な指導を重視する。活動的な中学年では、助け合い教え合って協議がうまくできることを柱に「わかるまで考える」という、学習に対するねばり強い積極的な姿勢を旨とし、学び合う中で「生かし合おう」とする態度の育成につとめる。

また、高学年では、本校の目指す「子どもの力が生きるバズ学習」として「求めて考え合う」という望ましい態度形成をはかり、より深く追求し、より多様な思考や言語活動ができる子どもの育成をねらいとしている。

2 授業実践と考察

(1) パン工場の見学計画を立てる授業から

子どもたちは毎日口にしてパンであっても、工場生産のようすを見たことはない。「パン工場の絵話を作ろう」で「パン工場を見て、うんといいお話を集めたい」という願いは、どの子どもにも絵話作りとつなげて、その期待は大きい。ここで大切なことは、何を見て、何を考え合うのかである。

○ 見学計画を立てる授業

(認知的目標)

パン工場を見学する計画を立て、見学の方法を理解する。

(態度的目標)

A 見ること、聞いて調べること、気づいてわかったことに分けて考えようとする。

B 友だちの考えにつけたして、もっとよい考えになるよう、よく聞いて話す。

(学習課題)

パン工ばを見学するけいかくを立てる。

(学習展開)

- 課題を確認する。
- ひとり学習の結果を見なおす。

(個人思考の例)

- パン工ばでは1日にパンがなんこやけるか、よそうをたてました。干こはやけるとおもいます。ざいりょうはどれくらいいるか、どこからかうかしらべたいし、なん人がはたらいているかもしりたいです。(Y児)
- どんなきかいがあって、どんな音をたてて作るのか見たいです。やくかまはどれくらい大きいのか、やくのをだれが見ているのか しらべたいです。

(グループバズ 10班)

- C1 (司会) パン工ばを見学する時、さきを見ることはどんなことがあるか教えてください。
- C2 パンをやく時間はどれだけか、どんな服を着ているのかしらべたいです。
- C1 いまは見ることやで、目で見てくることをいって。
- C3 ぼくは、どんな材料を使ってパンを作るか、材料が見たいとします。
- C4 機械のことをふやして、こねる機械とか、やく機械とか、切る機械かてあるとおもうで、そんなのをひとつひとつ見たいです。
- C1 材料からどんな作り方でパンになるか見たいです。
- C2 私はその作ったパンの重さが、みな同じか……
- C4 えゝ… 同じ重さ? いまは聞くことと、ちがいますか。
- C2 ぼくは、パンがよごれたり、くさったりしない工夫はどうするのか……は、どうですか。
- C4 それは聞くことにしてもよいと思います。
- C3 どんな形のパンがあるか。
- C1 それをふやして、どんなパンがよく売れるか、いや、これは聞くときよいな—
- C2 そしたら、パンの配達に行くところが見たいです。
- C1 (司会) もうないようですから、こんどは聞くことを教えてください。
- C2 働く時間は、どうなっているか。
- C1 どんなパンが、よく売れるか。
- C3 材料はどこから しいれるか。
- C4 どんな機械を使うか……
- C1 それは見ることのほうです。
- C4 機械の名前を聞くのです。

C1 パンの重さは、みな同じかを聞く。

C2 休み時間はどうしているか、ごはんはいつたべるかを聞く。そして何時におきて働いて、何時にやめて ねるかを聞く。……

C1(司会) もうありませんか…………… これでおわります。

- 全体思考(全体バズ)で班別に出し合った考えを検討する。
- 見学の仕方、見方・聞き方・持ち物についての注意事項を知る。
- 見学目あての確認、次時の学習を指示する。

以上概要であるが、見学計画を立てるために個人思考をどう充実させて、それをグループの話し合いで、いかにもり上げるかである。グループ内での話し合い結果は、成員の共通の意見として成立し、自己実現の場であって、価値的意識が生まれてこなければならない。そのためには、グループバズの次に全体の場合、どう生かすかに期待をよせているものとする。

(2) パン工場の見学から得たもの — 見学後の授業から —

パン工場の見学で人気を集めたのは、機械のあざやかな仕事ぶりであった。デイパーできじを小さく切って、ひとりで粉をふりかけて、すばやくまるめていくことや、鉄板にならべて、きじがホイロから出てくるパンは、白いパンの形にふくらんでいることなど、1つの機械を通るごとにパンの形が変わって、しょうせいがまから取り出したパンは、もうすっかりおいしくできた製品である。子どもたちのおどろきは大きく感動的であった。

また、働く人に目をつけている子は、あんこを入れる手ぎわよい仕事ぶりにおどろき、人でないと、できない仕事のあることに気づいている。ミキサーでこねた生地を手でさわってできぐあいを調べたり、生地を分かつきに入れたり、やき具合を見分けたりすること。できたパンは、不良品を除いて、数えてトラックに積むこと、など、人手にたよっている。そのほか、機械を人が修理したり世話をしないと調子よく動かないことも、よく観察している。

(3) 問題意識の高まり — 後半の学習へ —

「パンは、いくらでもできる」と考えていた子が、人や機械を通して慎重な配慮によってできることを知り、人が助けたり、見はらないと機械もうまく仕事ができない。「どうしてあんなにたくさんのパンが作れるのか」の秘密をさぐろうと発展する。

できたパンは売ってしまうのだろうか「六千九百人分のパンを売るには、どうしているのだろうか」「働く人はつかれないのか、びょうきの時はどうするのか」「働く時間割はどうなっているのか」と、最初のおぼろげな課題が具体化し、追求の視点がどの子にもはっきりしてくること、つまり、学習することが見えてきて、子どもに大へんちかずくのである。これは、見学が個人思考の場を広げたことになるのである。

(4) たくさんのパンが作れる秘密をさぐる — 大量生産の工夫の授業から —

(課題) たくさんのパンが作れるわけを考える。

(個人思考) 子どものノートから

- パンの材料は、水・イースト・こむぎこ・しお・さとう・バターです。これだけを大きなミキサーでまぜ合わせて、きじを作ります。バターは、一どにおじさんの手の山もり5はいく

らい入れなければなりません。とてもたくさんのごいりょうがいらいます。ミキサーはとても強いきかいです。だからたくさんつくれます。(H児)

○スライサーはパンを切るきかいです。長いパンはしゃくパンです。スライサーってすごいきかいだと思いました。ほうちゅうできるのより、ずっとはやいです。2つきかいがあって、うすくきったり、あつくきったりできます。きかいは小さいけど、すごい力があるとおもいます。こんなきかいですのでたくさんつくれます。とまったらつかえなくなって、どうするのでしょうか。(S児)

○てっばんにならべる人は、つぎつぎとくるから大へんでしょう。てっばんにならべる人は、ひとりだからえらいと思います。あっちへ行ったりこっちへ行ったり、いっしょうけんめいです。よくはたらくと思います。(K児)

これらの個々の観察から出たひとり学習は、断片的で、興味本位なものかもしれないが、人の手の何倍もの強さ、何倍もの速さ、どれも同一規格にする正確さ、人がじっとしていても働いてくれる便利さなど、機械のすばらしさをよくとらえていると思われる。このことは見学見通しがはっきりしていたことと、熱心にできたためと考えられる。またK男のように、かぎられた人数で大量生産するための人の苦労や、S男のように機械のことから、またその不便さを問題にしている子もいる。

これらの考えを十分出し合って、より高い価値追求がなされることを願って授業に臨んだ。

(グループバズ) 10班

本時のグループバズでは、始めF児とM児は、人の働きに着目して、大量生産の工夫を人の熱意や努力、分業に求める考えを出したのに対して、T児は、材料や機械という物の働きに着目して考えようとしている。T7は「機械が近くにあるで…」に対して、M8は「どうで…」と質問したことによって、T8の「機械が近くにあるから、すぐ入れたりできる…」と、機械から人に広がり、M10「機械ばかりでなく、人も働いてくれるからです。機械ばかりとちがうし…」という修正がなされる。このことが逆に機械だけでなく、人の働き及び人と機械のつながりにもなされていることを、M児にもT児にもより確かにされたと考える。子どもたちはひとつの側面からしかながめられないが、他の子どもの意見によりさらに広がる。この10班の他の成員の発言を見ても、分業(M4)・労働の熱意(M5)・労働時間・緊張感……などに及んでいる。

(全体思考)

この授業の全体バズにおいて、たくさんつくれるのは「機械があるから」と考えていた子は、C12「機械がやると早い」と人手よりもスピードのあることを主張し、さらにC6「機械が大きいから」C25「いろんな機械を集めているから」と高まり、さらに教師の方向づけから、C33「置く場所をきめていると、作る順に並べているからです」C33「毎日かえていたら、自分の係がどこかわかんようになるからです」と、高まる。仕事の能率を考えた働きやすい仕事場で、分業が、機械と仕事の位置づけにおいてなされていることに気づいているのである。

ここにバズ学習による授業においては、他とのかかわりを深める態度的目標を意識して、学習する子どもの姿がよくあらわれている。つまり個と集団との統合された学習の成果であると考える。

3 ま と め

プリテストとポストテストの結果を考察してみると、まずプリテストにおいて3班はもちろん、どのグループ内における既習知識も少なく偏差値は大きい。しかし、学習を進めていくうちに、かえって学習意欲を強化し、ポストテストの結果を見ても、進歩率は大きく通過率75%をはるかに上まわっている事実で、いずれにしても満足すべき結果といえる。

8班を見ると、能力にも、性格にも、問題にされる子がいるが、それでも、リーダーの援助やメンバーのはげましで、68点の得点を取るまでに努力している。尚、この子のノートを見ると、パン作りの仕事や機械の役目に関心が高く、絵もくわしく描かれている。しかし、労働条件の学習まとめに不十分さが目立って、理解不足がうかがわれる。この子は、フィードバックによる指導において、グループメンバーの協力もあってあとの整理によく努力している。

得点平均が90点を越えたポストテストの結果を見るグループは、グループ内がよくまとまっていて、大へんよく協力している。つまり素直な話し合いが、こだわりなくできる子どもが多く修学力が良いことを示している。

この学習が終わって1カ月後に行った転移テストの結果を見ると、中には記憶がうすらいだものもあるが、ポストテストよりも成績がよく、学習の後に、たしかなまとめやフィードバックによる掘りおこしに相互の追究が十分なされたからであると考えられる。ここに個人の追究が個人で終わることなく、再度仲間できり返され深め合っているため、強く意識づけられていて、協同で学んだことの成果を実証することができる。

(プリテスト・ポストテスト 班別平均)

班	プリテスト		ポストテスト		進歩率	転移テスト①		転移テスト②	
	得点平均	偏差(SD)	得点平均	偏差(SD)		得点平均	偏差(SD)	得点平均	偏差(SD)
1	45	9.94	91	6.55	83.6	97.5	43.3	100	0
2	53	10.72	89	7.14	76.6	100	0	100	0
3	34	3.46	84	9.79	75.4	100	0	100	0
4	50	2.00	93	7.68	86.0	100	0	100	0
5	48	3.26	87	5.07	75.0	92.5	12.99	93.0	13.0
6	44	3.26	85	7.48	73.2	97.5	43.3	100	0
7	41	9.94	92	9.79	86.4	100	0	97.5	43.3
8	43	8.30	84	9.38	71.9	96.7	47.1	82.5	13.91
9	52	18.55	94	10.39	87.5	95.0	8.66	95.0	8.66
10	45	10.3	98	2.00	96.6	100	0	100	0
11	44	9.70	85	14.25	75.0	97.5	42.3	100	0
全体	45.2	10.99	89.4	10.00	80.59	95.8	6.56	97.2	8.44

次に学習参加(態度)の調査結果を見ると、どのグループの平均も、可能最高得点36点に近く、密度の高い相互活動のできたことを示している。

また調査項目別に見ると、ポストテストでよい得点をとっている子どもは、「仲間に対する態度」は、「どちらでもよい」の立場の子どもが多い。その多くの原因は、どの友だちとでもよいわけで、自分の出した意見を協議されることが多く、教える相手は別に選んでいないことを表わしている。しかも他の成員は大へん満足度が高いのである。

次に中位群児は、学習課題に対する態度は満足しているが、仲間に対する態度は十分でないと考えている。このことは特に低学年の特色で、個性の強い主張が多いためやや協力的な討議ができず、その調整がむづかしいからである。

さらに下位群児においては、自分でもよく自覚していて、自分のわかっていないところをよく追求しようとし、友だちの協力を得て仲間によくかかわりあっているために、仲間に対する態度も大へんよいと示している。

しかし、まだまだ未分化の子どもであって、十分な話し合いはできないにしても、協議のし方を次第に身につけて、他とかかわる中で、考えを確かなものにしようとしていることは事実である。

子どもが書いた「パンがたくさんつくれるわけ」の学習のまとめを見ると、次のように書いている。

ぼくは、きかいがしごとをするからはやいとおもっていたが、○君がいったパンのできるじゅんぱんに きかいをならべると よけいにはやいと わかりました。はたらく人はかかりがあつて きかいは見はつていて、きかいをやめないで うごかせるし、きかいがきじを ちぎつてのせてくるので、しごともつづけてするので えらいけど、早くできるのだとおもいました。きょうはがんばつて考えたし、たくさんはっぴょうができて よい考えになつたので、◎をつけました。(K男)

(学習参加度調査) 可能最高得点 個人9点・グループ36点

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	平均
① 課 題 に 態 度	合計	35	34	32	36	34	33	35	32	33	36	31	8.43
	平均	8.8	8.5	8.0	9.0	8.5	8.3	8.8	8.0	8.3	9.0	7.8	
	偏差	0.4	0.5	1.0	0	0.5	0.8	0.4	1.7	1.3	0	1.6	
② 学 対 活 動 態	合計	34	34	32	36	34	35	34	34	35	33	33	8.50
	平均	8.5	8.5	8.0	9.0	8.5	8.8	8.5	8.5	8.8	8.3	8.3	
	偏差	0.9	0.5	1.0	0	0.9	0.4	0.5	0.9	0.4	1.3	1.3	
③ 仲 間 に 態 度	合計	35	34	34	35	33	36	35	35	33	36	33	8.61
	平均	8.8	8.5	8.5	8.8	8.3	9.0	8.8	8.8	8.3	9.0	8.3	
	偏差	0.4	0.9	0.9	0.4	1.3	0	0.4	0.4	1.3	0	0.8	
全 体	平均	8.7	8.5	8.2	8.9	8.4	8.7	8.7	8.4	8.4	8.8	8.1	8.52
	偏差	0.62	0.65	0.99	0.28	0.95	0.62	0.47	1.19	1.11	0.83	1.32	0.90

子どもたちは「パン工ばではたらく人びと」の学習から、製品作りの仕事や機械の働きはもとより、人々が協力し合っていることの大切さを学んでいる。加えて、自分たちも同時に協力して目標達成に向けた努力を体験して、その重要性を十分学んでいると思われる。学習過程において、子どもたちは、まちがいても、いがみ合いもくり返しながら、絵話の発表には自信ありげに話している姿は、誠にはほえましい極みであった。

第14回 全国バズ学習研究集会

「学力と人間関係の統合」

姫路市立八木小学校

撰 筆

< 研究主題とその要旨 >

最近の社会情勢は、科学技術の長足の進歩、膨大な情報量、自然破壊、人間性の喪失等々、目まぐるしく変化し、教育に対する期待や関心・要請も多様化し大きくなっている。創造性の開発、豊かな情操や強い意志、自主性の育成、体力の増強等々から、教育の内容の精選・集約、指導課程の研究、教育機器の活用など指導法に関する重要な問題が提起され各方面でいろいろな観点から研究され実践されている。

しかし、点数の分からない高校生、手紙も満足に書けない大学生等々、基本的初歩的な問題のあることも事実である。

学習指導要領が改訂され、指導の効率を高め、知・徳・体の調和のとれた教育が要請されている今日、認知目標と態度目標を同時に達成する全人教育をすべき学校教育本来の使命を再確認する必要がある。

< 研究内容 >

全員参加による課題解決学習の進め方

1. 指導形態の改善とくふう。
 - ・ひとりひとりが生かされるグループ学習。
2. 指導課程の改善とくふう。
 - ・課題の明確化を図る
 - ・見通しが立てられる

3. 資料・教材・教具のくふう.

・手軽に活用しやすい教材教具

—— 理科学習の実践を通して. ——

・5年 水溶液教材

(固体が水に溶ける量を調べ、水溶液の濃さと重さとの関係を理解させる.)

* 色水の三段重ねに挑戦しよう ----- 問題意識を持つ

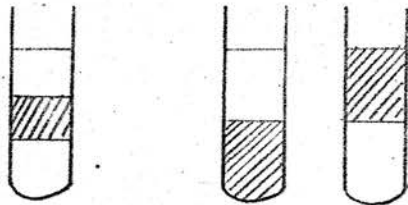
教師

児童

・解明点をしぼる

(個人 ↔ 班)

・明確に問題を構成する



先生の使っている水溶液(飽和食

塩水)に飽和がありそうだ。 ----- 問題意識を持った学習の展開

- ・質量保存の法則
- ・濃度と比重
- ・溶解度
- ・析出

< 問題提起 >

1. 話し合うことと、教えこむことの違い、目標にあった課題の配列
2. 児童の相互の力が働き合うことを重視し、それを有効に活用する教師の立場
3. 聞けばよいという容易さが、依頼心と助長し、個人思考を深めない

第14回 全国バズ学習研究集会

学力と人間関係の統合

(小集団を生かして算数科の学習効果を高める研究)

姫路市立城南小学校

安積 収

〈研究とその要旨〉

本校ではひとりひとりの子どもが人間として持っているすべての潜在的な可能性をできるかぎり実現させるために、ひとりひとりが所属している集団があたためた雰囲気になり、意欲がでるような集団の規範と組織化をはかり、そして、集団生活に必要な基本的な行動様式を身につけさせるとともに、子どもの特性(個性)を生かし、相互に磨き合い、協同する学習をすることによって、人間関係と学力を同時に高めようと考えている。

その小集団学習をより有効なものにするためには ㊦ 集団の組織 ㊧ 課題づくり ㊨ 教師の役割 ㊩ 評価 の四つが考えられる。この中で特に今、研究の中心として掲げている ㊨ の教師の役割を算数科の実践から述べたい。

〈研究内容〉

㊦ 集団の組織について

- ① 学級の実態を知る
- ② 班の編成方法
- ③ 班の構成
- ④ 人数
- ⑤ 役割

㊧ 課題づくり

- ① 学習課題の明確化
- ② 予習課題

⑦ 教師の役割

研究主題 — 算数科の原点を求める学習指導 —

算数科の原点を ① 算数をつくり出していく努力であり、② そのために必要とされる数学的思考を持つことであり、そして ③ これを「単純」「明解」「正確」なもの 即ち美しいものにまとめあげることにあると考え、学習指導展開の中に位置づけしようとしている。

具体的事例

- ② 長さくらべの学習指導 …… 2年
- ③ 三角形の …… 3年
- ④ 面積(広さくらべ) …… 4年
- ⑤ 四角面積 …… 5年
- ⑥ 式と計算 …… 6年

事後考察

- ・ 算数科の原点から
- ・ 予習課題から
- ・ 効果的な機器の活用から
- ・ バズ学習の場から

以上のような観点から考察を加えることにより、より望ましい学習指導形態をつくり出そうと努めている。

⑧ 評価

- 1. 標準学力テストの実施
- 2. 学習効果テスト
- 3. 学習意欲調査
- 4. ソニオメトリックテスト

《問題提起》

基礎学力を身につけるため「望ましい集団の規範」を礎として学習活動を展開しようとしているが、この規範を持続させる具体的方法はどんなものがあるか。

広島県豊田郡豊町立豊中学校

はじめに

本校は、1969年度の差別事件の取り組み並びに、1970年度の問題行動生徒への取り組みから学び、生徒の進路を保障する教育とは、その課題に近づく指導とは、学習の仕方とは、を問い求めてきた。この教育課題に迫り得るものとして ①、教育の目標が、人間形成の確立にあるとすると、具体的には、自主的・協同的・創造的な行為行動ができる主体の形成を確立する事である。②目的達成の方法は学習する事であり、学習はより高い価値への変容を目指す行為である以上、生がいを通して行なわれる行動であるが、学校という機能は、その基礎的・基本的能力態度の形成にある以上、学習者に自主・協同・創造の学習行動ををとおしてその能力態度の変容をはかるべきである。それに適応する学習法をバス法に求めながら地域に根づく教育内容の創造にむかって歩み続けている。

教育内容とは、生徒の生活全般にかかわることを指すものであるが与えられたテーマが「授業改善」であるので、授業、とりわけ、その過程について実践してきた事を中心に提案し、皆様の御指導をおおぎ明日からの私達の指針としたいと思う。

1. 「单元見直し学習」に取る組む以前の授業過程

学力の保障を確立するために、先づ、学習者に学習への関心と意欲をもたすことであると考へた。学習者の学習への関心と意欲は、自然的に発生するものではなく、誘発する動機が必要である。その動機は「人間だれしも持っている内在的な基本的欲求である。わかりたい、知りたいという探究性」によって誘発され「わからない事や出さない事」とりくんで、一定の方向性や、めどがついたり、具体的な到達点に達する。即ち解決がついたとき、成就感を味うその瞬間から関心と意欲が自主的に生じるものと規定して「学習の手だてのシステム」を構想し示唆指導した。とりわけ学習は、主体的・協同的・創造的に再生産をはかることを具体的に示唆しながら実践をした。その過程で、主体的に自己実現力をつけていく生徒に変革させなければというところにきてしまう。そして、その手がかりは「自己課題をもつ生徒」になつてもらふことである。この自己課題をみつけ課題解決のしかたの学習方法を30分学活を中心に指導しようとした。

授業の中で自己課題をつかませる指導として、

①問題と質問点を明確にする。

②問題は多くの要素から構成され、要素相互のつながりのあること。

③各人のだす情報はその視点を明らかにして出す。

④グループは情報を整理してまとめる。即ちつくり出すことの繰返し
の活動を繰返す(ドリルする)

上記4点を大きな柱として実践した。その結果問題点が課題へと組織され、それへの取り組みの姿勢は見られるようになったが、全体的に見ると生徒の課題意識を問うよりも教師自身の問題である点が大きく指過された。例えば、時間毎の目標は設定し、こまかい配慮をして取り組んだし、その時間内のポストテストではかなりの理解度を示し一定の評価はできた。それなのに大きな単元でのテスト(中間・期末テスト)ではかなり低い通過率の問題があることだ。一つひとつの項目についての質問にはかなり高い通過率を示しているが、それが全体の流れの中でどんな位置にあるのかというような統合する力を問う質問になるとかなり低くなっているのである。

このことから、生徒達は、これから何を学ぶのか、その概要をつかま
ずにコマ切れの極小単元の中に埋没し、横の関連をとりうる術もなく、
分断された知識内容に終始するようになされた。としか言いようがない。
つまり、教師の教材構成の問題がその全てであるといわねばならな
い。まさしく、教壇こそ教育条件であったのだ。

この反省にもとずき、単元全体の内容を一目でわかるようにする。
準備事項、学習到達目標の設定を柱に授業改善を旨としたのである

2、「単元見通し学習」の過程

前項の反省をもとに「単元見通し学習」を組織することによって、自主・協同・創造の態度を高め、「知的認識の確立を計る」ことが出来るとの仮設のもとに、次のように単元を構成したい。

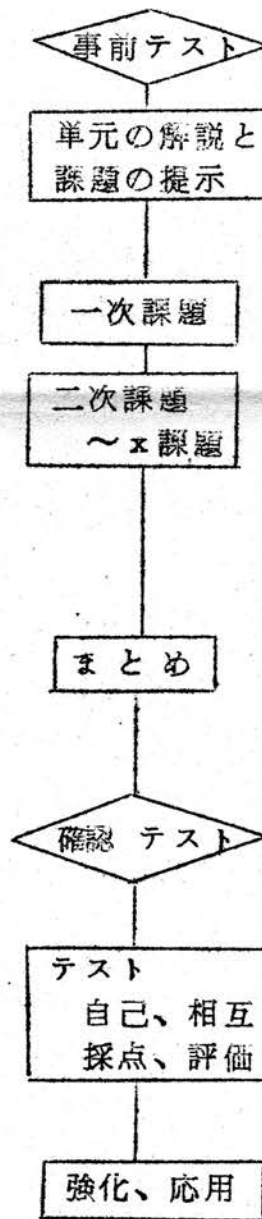
◎準備過程

レディネスと自己見通しの整理と問題意識化のために

◎課題解決過程

単元を構成する内容課題

◎確認過程



・単元を通しての学習内容にかかわって

・解説と力点と見通しについて十分な説明と指示

・一時間の流れは教師が簡単な示さ、指示説明

・支援

・まとめと計画指示

・総括的まとめ、教師の説明

・成果と補充点の把握

・再訓練と次単への準備、バス集団活動を基本とする中で、個別指導が可能

(1)「単元見直し学習」は、課題の構成と提示が生命

多くの場合、教師が課題を与えて、生徒が受容した時初めてそれが問題となり、学習への関心と意欲が高まるのである。受容されるには、興味、関心の強いものでないと、意欲かん起にはつながらないであろう。又課題提示に及んでは、こまかい説明と指示をして学習の見直しを明らかにしなければならない。

(2)「単元見直し学習」は、教育相談づくり、学習集団づくりの中核

「ゆとり」(見直しを持った学習)のある学習の中で、「共通目標：共通課題」にむかって、協同学習を維持促進させ、その中で個人の補充強化をはることができる。個別指導はバズ集団活動を基本とする中で可能である。特別の手だてを要する生徒への補充強化を優先することは当然であろう。個別指導は、教師と1対1で成立するのでなく、あくまでも個(生徒)が集団の中で活動し補充、強化していく(されていく)ことへの援助を教師がしていくということである。

(3)おわりに 反省と課題

教育効果の有無は、生徒がいかにかわったかによって評価すべきであろうが、生徒を変えようとする目標と生徒の実態の把握の上に立って、なにをどう活動させるかの、しっかりした見直しで「課題」を設定することがかなめであることは、前述したとおりであるが、それも、「単元見直し学習」の経験をくりかえし、共通し、一貫して重ねさせることこそ重要であると思う。諸先生方の御指導をお願い致します。

第14回

全国バズ学習研究集会

学力格差を克服するために

豊高等学校
石川恵美子

〈研究主題〉

学力格差のある集団で、一人ひとりの生徒が課題をもち、互いに高め合う学習ができるようになることを目標とする。具体的には、当面バズ学習(ユニット学習)の取り組みの充度をほかることを通じて、現状の大きな学力格差を克服することを目標とする。

〈研究内容〉

1. ユニット学習に取り組むまで

- 1) 我校は2年前に独立するまで、島の分校でした。
- 2) 差別的な地域のみかで、切り捨てられて分校に集まってきている生徒を一番差別視していたのは分校の教員ではなかったかという反省を解放運動から学び、部落の完全解放をめざす教育内容の創造という目的意識をもった取り組みが始められました。
- 3) 分校差別を解決するためには、中学校との連携が必要だと考え、交流をもつ中で、中学校で取り組まれていたバズ学習に高校も取り組み始めました。しかし、教員自体、なんでもいいからグループを作ってガマガマと話すのがバズであるという程度の理解しかない状態で、次第に行きづまってきました。
- 4) そんな時、豊中に指導にいられていた塩田芳久先生から私達もご指導を受けるようになり、話し合いの必然性、はっきりした課題が必要であるこ

となどの指導を受けました。つまり、もっと学習計画を綿密にたて、生徒が具体的に働ける課題があって、はじめから学習が成立するという事でした。

2. 我校でめざすもの

1) とにかく席へつかひければ授業が成り立たないという意識の中に埋没するのでなく、まず「わかる授業」そして「わかりたい授業」をつくる。
認知目標と態度目標が同時達成できるような指導計画が必要である。

2) 生徒が一人ひとり切磋されて、互いに競争しあう授業でなく、相互に尊重し合い、助け合い、協同する授業をつくる。

3) 毎日の授業が細切れで、1時間の授業が終る頃に、なる程とわかってくるような、教師の名人芸にだけ頼る手品のような授業でなく、生徒が見通しをもって自主的に学習できるような科学的な授業をつくる。

4) 評価のシステムをより科学的にする。

5) 学力格差の大きな生徒集団の一人ひとりに、目標と課題を与えうる授業をつくる。

6) こうした取り組みを、高校だけでなく、地域ぐるみで、つまり幼・小・中・高の一貫教育態勢の中で進めてゆくことで、学力格差の解消をはかる。

3. ユニット学習の基本的視点

1) ユニット学習の生命は、体系的な目標の明確化と、それに対応した生徒が主体的に働ける課題提示にある。

2) すべての活動は、評価(確認)活動をともしなう。

3) 生徒に見通しをもたせるために、ユニット全体の課題を事前に提示する。

4) 一単元の基本的構成は

プリテスト → 学習・指導案作成 → 課題提示 → 授業 → まとめ
→ ポストテスト → 補充

5) 一単位時間の授業の流れの基調は

課題提示 → 個人 → グループ → 全体 → 補足・修正・まとめ →

4. 学習計画 時間 期間 月 日 ~ 月 日

時間	課題	活動		評価方法	修正事項
		生徒	教師		
(一時間ごとに区切る)	プリテスト 課題 (1) (2) (3) (認知目標と 照応して見 出し程度)	(生徒の学習活動の要点を簡略に記入)	(教師の援助活動を予想に基づき記入)	(確認作業の方法等を記入)	(プリテスト 或は、 展開途中の 修正につ いて記入)

5. 提示課題(課題を生徒に提示する形で記入) (相互点検の中心)
 可能なかぎり、基礎課題と発展課題を用意する。

課題(1) (学習計画記入のもの)

- 1 (課題によっては、テキストのページを明示する。)
- 2
- 3
- ...

6. 修正内容 (計画の修正が行なわれた箇所の修正事項具体的な内容を事後に記入する。)

(資料とする。)

7. 態度目標のチェックポイント(参加度等)

そのチェックは、ポストテストと同じあつかいとする。

8. 高校では学習指導案簡素化のための略号を: (流しは→印で)
 (複合する場合は併記)

1) 生徒の学習活動にかかわって

S=個人で C=クラスで T=課題 P=二人で(隣りと)

L=教師が B=黒板に G=班で free =フリーに

2) 評価方法にかかわって

D=机周巡視 st=口テスト note=ノート提示, その他

Sp = SP分析

第14回 全国バズ学習研究集会

学習指導における個別化と集団化の調和をめざす教育機器の活用

長崎市立 城山小学校

教諭 宮崎 淳右

<研究主題とその要旨>

人間性豊かな児童の育成が問われている。一斉授業の学習形態をとることの多い日々の授業において、個を生かす確かな方策が、今日的課題となっている。ここに一つ、教育機器の利用が考えられ、実践されている。

教育機器の導入により、学習の個別化が容易になるという意見があり、反面、機械による教育では人間関係が損なわれるという厳しい批判もある。機器至上主義は避けたい。

各種の教育機器がもつ特性をとらえ、その特性を授業に位置づけ、効果的に生かすくふうを考えることは、価値あることだと思ふ。以下、道徳での実践例を示すことにする。

<研究内容>

児童ひとりひとりの心情を深め、実践意欲を起こさせる有力な方法の一つに、「教育機器の利用」がある。いつ、どのように使えば効果的であるか、本校での一時間の授業における機器活用の例をあげてみよう。

意識化

- ・OHP—— 実態調査の表やグラフを提示することにより、問題意識を起こさせる。
- ・録音テープ—— 児童の作文や声などを聞かせることにより、問題意識を起こさせる。
- ・RA—— 生活の中における意識をチェックし、指導のめあてとする。
- ・テレビ—— 視覚・聴覚に訴えることにより、児童をドラマの中に没入させる。

問題

- ・スライド—— 録音テープを併用することにより、視覚・聴覚に訴え、感動場面を児童の心に焼きつける。また、同じ場面を再現させる。
- ・OHP—— 録音テープを併用することにより、スライドと同様の効果をあげる。さらに、TPの重ね合わせや消去、動的な取り扱いなどにより、より

の
深
化

感動的に中心価値へと迫らせる。

- 録音テープ——スライド、OHPと併用し、それらのはたらきをより効果的にする。
また、読み物資料の読解の手助けをする。
- RA —— 追求された価値に対する意識をチェックし、意識化の段階での意識と
のずれや変容をみる。また、グループでの話し合いにおける価値への
迫り方をチェックする。それらを指名手順に生かし、話し合いを深め
る。

意
欲
化

- OHP —— 意識化の段階で提示した実態をもう一度ふり返らせたり、新しい問題
場面を提示したりすることにより、実践への心構えをもたせる。
- 録音テープ、スライド——それぞれに、または併用して、しめくくりを印象的にする。
- RA —— 実践への意欲をチェックし、本時学習における意欲の変容をみるとと
もに、児童に対しては、より望ましい実践化への方向づけをする。

このようにしてみると、OHP・録音テープ・RAは、どの段階においても有効な機器で
あり、授業の流れをつくるものだと言える。

RAに関しては、それを学習診断に活用することが、わたしたちの主なねらいである。こ
の際、重要なかわりをもつのが、模造紙やOHP等で提示する選択肢である。チェックす
る内容が判断でなく心情にかかわるものであるだけに、その構成は、かなりむずかしい。

授業のどこのチェックポイントで、どのような選択肢を構成すれば、ひとりひとりの意識
を適確にとらえ心情を高めさせることができるか、実践をとおして追求していきたい。

問題提起

1. 選択肢を用いてのR.Aの利用については、選択肢が児童の思考方向を規制す
る面がうかがえた。
2. 機器の導入によって、授業の効率化がえって妨げられるということがあ
った。(/ 時間の学習量の減少)
3. 教師と児童、児童と児童の間に機器が入ると、人格的な感化が損なわれると
いう面を感じた。

< 以上 >

第14回 全国バス学習研究集会

学習と指導に教育機器を活用する

広島県豊田郡豊町立豊小学校

吉 岡 晃

〈研究主題とその要旨〉

学習と指導に教育機器を活用する

子どもひとりひとりの能力を開発し 学習効果を高める方策

—— 学習指導の効率化と教育機器の活用 ——

〈研究内容〉

- 1 実践に対する基本的な考え方
- 2 フローチャート導入の動機
- 3 歩み
- 4 本校の学習指導案

問題提起

- 1 目標行動の分析（資料 論理 行動）は 教科 学年に応じて
どのようにすれば ひとりひとりの意欲を育てる学習につながるか。
- 2 教育機器を活用して学習の効果を高めるには 評価プログラム
を明確にして 形成評価を重視しなければならない。このとき
の配慮は如何にあればよいか。

第14回 全国バズ学習研究集会

—学習と指導に教育機器を活用する—

姫路市立城南小学校

平井 均

<研究主題とその要旨>

ひとりひとりの子どもが、主体的に学習に参加し、それぞれの子どもが持っている創造力や才能資質を自由に発揮して活動するような学習の方法と場をつくりだすこと、また、子どもひとりひとりが自らの考えを発言し、それがクラス全員に受けとめられ、それぞれ自分の考えで振り返し友だちに返していく、協力と連帯の中での児童相互作用を高めることは学習指導に欠くことのできない課題である。教育機器によって、学習の方法や場をさらに工夫改善していく道は広いが、機器を使用すれば、それで学力になっていくというものでもない。いろいろな機器の特質を知ることや、機器の位置づけ、資料の特性を考察することなど数多くの問題があるが、学習と指導に教育機器を導入し活用することが、学習の効率を高め、自主的な学習をすすめていく助けとなると考えている。

<研究内容>

学習集団の学習の効率を高め、ひとりひとりの自主学習をたすけるために、教育機器の活用をはかる。

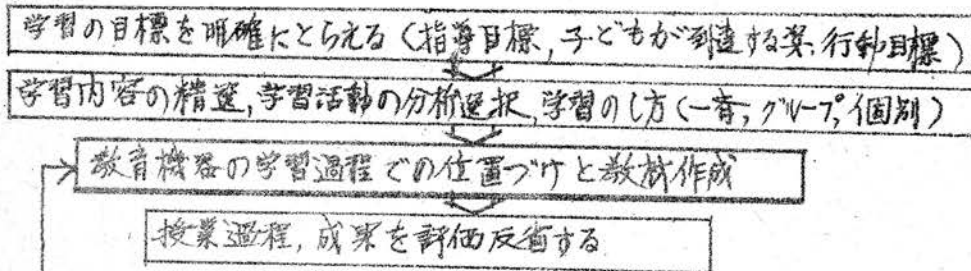
- (1) 機器を効果的に使用し、学習課題が全学習者に確実に受けとめることができるようにする。
- (2) 学習に変化をもたせ、興味や関心をもって課題に迫れるように工夫する。
- (3) 児童が主体的に学習するように、操作、作業を取り入れ思考を深めさせる。

(4) 即時評価をすることによって、児童の疑問をはやくとらえて解決させる。

○ 教育機器を活用するにあたって

教師が立案して一方的に知識を伝達したり説明に終始する授業では、いつまでも受身で、教えられたことを覚える学習にしかならない。子どもが意欲的に取り組めるように教育機器の取り入れ方やソフトウェアの開発、作成に工夫をすることと共に、教師が主体的になりがちな学習を計画する段階で、学習過程の中に機器をどう位置づけるかということが大切であることなのである。

授業計画段階での考察



(いつ) (どこで) (どんな機器を) (教材を) (どのように活用するか)

以上の内容について、算数科と社会科に事例をとって考察してみたい。

<問題提起>

- (1) 教育機器の特性をいかして学習目的を十分に果たすような学習過程での位置づけはどうか。
- (2) 教師の提示するための道具としてだけでなく、学習者の情報交換、学習者自らの道具としていかに活用するか。
- (3) 教育機器を活用することによって、映像資料を情報としていかに処理考察させるか。

第14回 全国バス学習研究集会

＜教育機器の利用研究＞

学習に積極的に取り組む授業をめざして

兵庫県立洲本実業高等学校

藤 本 福 雄

研究主題とその要旨

最近の入学率の上昇と普通科志向、また、生徒の進路意識や基礎学力の低下などの傾向は、益々職業高校の諸問題を生む要因をつくっている。現在の職業教育の革新は、制度改革の課題のとり組みを切りはなして考えられないとよく言われる。ところが、現実には無気力な生徒や基礎学力の欠如した生徒を数多く抱きかかえているのである。したがって、たとえ、一教科あるいは実習の一項目からでもはじめる部分的改善を積み上げることによってすこしでも生徒の学習意欲を高めたり、進路に展望をもたせるなど、教師として、当然の責務ではないだろうか。本校においても、多様化傾向や無気力、基礎学力低下の問題は、益々、生活指導上の問題と日々の学習指導を困難にしている。そこで、この現実に対処すべく、少しでも「学習に興味をもたせたり」「学習に積極的に参加させる」ことをめざし、与えられた教科指導の中で、できるかぎりの努力と、教師として当然の義務をはたす努力をおしななかった。

そして、学習に興味を持たせ、積極的に参加させる授業をつくって行くために、昭和40年、教育機器を導入して以来、継続して進めてきた教育工学の研究成果をふまえ、よりよい授業に少しでも近づけるために、常に授業の主役である生徒に、その効果を問うことの大切さを強調し、たえず、生徒の意見を吸取してきた。

研究内容

わたくし達は、最近とくにふえてきている無気力な生徒や能力の多様化、あるいは基礎学力の低下の現実に対処して、少しでも学習に興味をもたせた

り、学習に積極的に参加させる授業をめざして実践を進めてきた。
そして、その研究や実践の柱を上げてみると、

第1に

無気力な生徒や基礎学力の低下の現実に対処して「わかる授業」
をめざすために、視聴覚教材の日常化をはかる実践・研究である。
(ただし、視聴覚教材の効果的利用をめざすことが、その中心課題)
でなく「わかる授業」の追求であることを強調しておきたい。

第2に

能力の多様化や基礎学力の低下のほらつきに対処して、できるか
ぎり「落こぼし」のない配慮を行なう。そのための一方法として
学習の個別化を推進させる。また、学習の内容に応じて、一斉学
習や個別学習を自由に計画できる柔軟な授業システムを考える。

そして、1と2の研究を効果的に推進して行くために

- a) 常に授業の主役である生徒に、その効果を問うことの大切さを強調する。
- b) 実践しやすい教科から(無理のない実践、おしつけのない研究)
- c) 研究活動の広がり推進(一人の百歩より十人の一歩)する。

以上のように、私達は、与えられた教科の中で、少しでも生徒が積極
的に授業に参加し、効果的に学習の定着をはかる研究を十数年間、繼
続して進めてきた。

また、具体的に生徒の意見をひき出す方法として、次のようなことを
行なってきた。

1) 毎時間終了後、授業アンケートを記入させる。

※このことは、藤本が担当する実験・実習(3時間連続授業で
時間的余裕があり実施できる)で実施、当日、具体例を紹介
したい。

2) 実験・実習の実験報告書には、学習の理解状況や授業に対する
意見を自由に書かせる。このことは、授業後、報告書をまとめ
ながら、今一度授業をふり返り、授業での自己診断と教師の指
導方法に対する生徒の気持を正直に書かせる。

3) 定期的(年度終了前や各学期終了後など)に授業や教育機器に
関するアンケート調査を行なう。

ところが、前記のような生徒に意見を記入させることは、正直言って、そう容易なことではなかった。(教師に勇気がいった)

しかし、本当に生徒の「落ちほし」や、自からの授業を改善するためには、生徒のなまの声をできるかぎり数多く摂取することが大切であると言う考えから続けてきたのである。

次に、調査の一部について紹介しておきたい。

◎ 一年生実習アンケートより 電気科第一学年

調査日・人数 (昭和53年12月 1日 (77名)
昭和54年 7月13日 (77名)一学期終了時

1) あなたは授業に積極的に取り組んで来たと思いますか。

	はい	まあまあ	いいえ	
昭和53年	57.5	40.0	3.5	
昭和54年	55.0	40.0	4.0	%

2) 1の項目で「はい」「まあまあ」と答えた人は、次のどの項目が学習を積極的にさせたと思いますか。

	学習内容	教育機器	その他	
昭和53年	39.0	61.0	0	
昭和54年	38.0	55.0	7	%

3) 教育機器の活用についてどう思うか

	どんどん使ってほしい	少々活用をへらす方がよい	使わない方がよい	
昭和53年	92.5	5.0	2.5	
昭和54年	90.0	7.5	2.5	%

◎3年間、教育機器を使って学習を進めてきた生徒に聞く

昭和54年1月(72名)電気科3年生

1) この3年間、教育機器を使って学習を進めてきましたが、このことについて、あなたはどのように感じていますか。

- 大変よかったですと思う・・・・・・・・・・13.8%
- まあまあよかったですと思う・・・・・・・・・・80.5%
- わからない・・・・・・・・・・5.6%
- よくなかった・・・・・・・・・・0%

2) 教育機器をよく使ったのは、普通電気科ですが、このことについてどう感じていますか。

- よかったですと思う・・・・・・・・・・86.1%
- なんとも思わない・・・・・・・・・・13.9%
- 使わない方がよかったです・・・・・・・・・・0%

私達は、昭和40年に教育機器を導入して以来、一貫して教育機器の効率的な活用をめざして実践を続けてきた。とくに、実践の経過の中で、ともすれば教育機器の活用はその主眼がおかれた時期もないうちはなかった。しかし、教育機器の活用は即教育効果を高めるとは言い難い。したがって効果的な授業をめざすために、その授業の主役である生徒に、その効果を問うことによって、よい授業を創造して行くことの大切さを強調してきたのである。

第14回 全国バズ学習研究集会 (第2分科会)

学習と指導に教育機器を活用する
— 校内で教育機器活用の輪を如何にして広めるか —

兵庫県 姫路市立東中学校

原 田 守

1. 研究主題とその要旨

一口に教育機器といつても、1個のテープレコーダーからテーピングマシン、更にはC.M.Iシステムに至るまで、科学技術の進歩と共に教育機器も急激に研究開発が進められている。一方機器教育への関心と研究実践はここ数年来急速に伸びたといわれ、授業のシステム化・教育工学という言葉もよく聞かれこの面の研究図書も数多く出版されている。

しかし、学校における現場の実態はどうであろうか。一方では学校建築段階から地域をあげて機器教育に適した設計・施工、施設・設備が将来までを見越して設置され、先進校として深く実践研究をしている学校もあれば、一方数台のO.H.P.でさえ教具室の片すみにほこりをかぶつて眠っている学校もある。現在機器教育の分野程大きな学校格差が感じられる面は他に見られない。

自分も前任校ではこの面の研究実践で推進役の1人として意欲的に取り組み学校あげて実践もし、ある程度の成果を挙げ得たと自負しているが、転任と同時にこの格差の大きなことを痛感した。組織体である学校では、1人の百歩前進よりも百人の1歩前進が必要であり、機器教育も1校のずば抜けた飛躍よりすべての学校を1歩前進させようとする努力こそ急務であると信ずる。そこで高度の理論はぬきにして、如何にすれば学校教育の中で、特に授業の面で、教師が機器の有効性に目覚め、それを活用しようとする機運を高めることができるか、という点について問題を提起して、皆さんのご検討ご指導を賜りたい。

2. 研究内容

教育機器活用を更に進める為の研究として発表する程のものは何も無い。ただ現在なおこの面について真剣に取り組んでいない学校が今後実践を始める為の参考として、過去の実践や体験にもとづいて私見を述べる。もちろん各学校で簡単に取り組めることが前提であるから、機器といつても各学校にある程度普及しているO.H.P.・スライド・V.T.R.・映写機・テープレコーダー等に限られる。

- (1) 理論よりも先ず実践
- (2) 校内研修組織の確立と管理職の姿勢
- (3) 校内研修として実施したいこと
- (4) 手軽に利用できるために

(5) 教職員の啓もう

3. 問題提起

(1) 理論より先ず実践 (使ってみよう)

教育の現代化を考えると、その内容と方法がある。授業にも多くの学習内容があり、指導方法がある。どれも万能といえる方法はない。授業に関係のあるすべての諸条件を洗い直し、その単元その時間の目標行動を達成するために如何に効率的なよりの確な条件を計画し実現するかを解決しなければ、最適化された授業の展開を期待することはできない。それが授業のシステム化であり、特に授業に機器を導入するとすると、より以上にこの手法が重要性を増す。即ち、

なんのために	—なにを—	どこで	—どのように—	使えばよいか
(目標行動)	(媒体)	(流れの位値)	(方式・手法)	(最適化)

しかし、機器の構造・特性とか、授業の最適化はここでは問題にしない。これらはある程度機器の活用が定着してから更に研究を進めるべき事であつて、最初から高度の理論をぶつけると機器アレルギーの教師をつくるだけである。機器活用の第1段階は何んといつても、

「いつでも・どこでも・だれにでも・手軽に手間をかけず利用できる」

ということを最重点において取り組まなければ、拒否反応を起すことは明白である。理論的根拠のない実践にも問題はあるが、実践なき理論はまさに空論に過ぎない。先ず使つてみて問題点を発見し、理論を研究して軌道修正をし、更に実践によつて実証していく。教育機器も特性を知つて利用するのではなく、利用することによつて特性を知るという考え方が大切ではないかと思う。

「議論するより先ずやつてみよう、使つてみよう」というのが自分の持論である。

(2) 校内研修組織の確立と管理職の姿勢

イ) 努力目標の中の具体的努力事項の1項に

年度末も近づく各学校とも本年度の努力目標を反省評価して次年度の原案作成準備にかかる。その中には必ず「学力の定着」とか「職員の研修」の項が見受けられる。教育機器活用のためにはその中の具体的努力事項の1つに、「教育機器を利用(活用)した授業の改善」的なものを明確に盛りこみ、年度始めに全職員に重要性を徹底させ、共通理解をさせる事が大切である。努力目標にあがつておれば、あらゆる面(研究授業や備品・消耗品の購入等)で係教師も非常に活動がしやすくなる。学校の民主化の美名のもとに教師の立ち上りを待つのみでは、効率的な学校経営は望めない。

イ) 機器 (ハード面) の配置は分散管理で

ある学校で会議があり出席した。会議室として視聴覚室が使われた。室内はきれいに整備されていた。中には OHP が / 0 台程と移動スクリーンが三脚と共に数個整然と並べられている。その他 TV・VTR も設置しており、ガラス戸だにはテープレコーダー・8mm 撮映機・映写機・スライドが並べられ施錠してある。別の戸だには市販の TP や VTR 用の録画テープ、一見よく保管されているが果して活用されているのか? と疑問に思つた。読書でいうと積読の部類ではなかろうか。

学校に / つしかなく、しかも時々しか使用しない機器は、係が視聴覚室で集中管理するにしても、OHP や移動スクリーン・テープレコーダー等は手近に置く為に分散管理をしなければ、その活用は図れない。VTR も 2 台あれば視聴覚室と理科室というように。特に階段を上下する移動は絶対避ける。OHP は特別教室には専用のものを設置したいし、普通教室にも 2 教室に / 台 (隣り同志で) は欲しい。保管はどちらかの教室か、それが狭いようなら廊下でよい。学校に 4~5 台しかなければ、学年毎とかフロア単位にし、管理は生徒の手で。長期休業中は / 箇所を引き上げ、点検・清掃・補修等をする。

ロ) 資料 (ソフト面) の配置は集中管理で

視聴覚室のある学校でも / 教室、それも普通教室の流用で隣接の準備室もない。現状では視聴覚室のない学校がほとんどではなかろうか。どちらにしても資料等を一括視聴覚室等に整理保管することは感心しない。常に目のつく所、手の届く所に置かないと活用はされない。その為には職員室の何処かにスペースを設けて整理だなを置き、ガラス戸にして外から資料が一目で分かるようにするのが最もよい。資料はもちろん整理が肝心で、TP 等は教科別・単元別・学年別に背表紙をつけたケースに入れ、分類整理の為の記号・番号を学校で統一して明示し、録画・録音テープやスライド等も、これは何が入っているかが、すぐ分る方法を取り、できれば TP 目録・テープ目録等を作成して一覧表にしてはりつけるか、冊子にして横に下げるようにしておけば申し分ない。自作の TP も個人で所有せず、必ずケースに入れて整理戸だなに置き、授業の時はケースのまま持つて行くようにする。

ハ) 資料作成の材料の準備と管理保管

資料作成を円滑に行うには、それに必要な消耗品や用具の充足が十分行われなければならない。制作材料が足りないと作成意欲を減退させ、教師を機器の利用から遠ざからせる原因になる。

手書きの最も簡単な T P を作成するにも、クリアシートかセロハンロールシートに O H P 用油性・水性ペン（太い・細いいろいろ）、マジック大小、セロハンテープ、紙わく等が必要であり、複写法ではその機種に合った T P 用シートがいる。更に技術化・高度化すると作成に必要な材料はますます数多くなる。録画・録音には生のテープも種々必要である。

これらの材料もできれば職員室で資料だなに隣接した材料用戸だが、ぜひとも欲しい。そこに行けば何でもそろつていという状態にしたいものである。しかし使用管理は充分指導徹底しないと、1人が2・3枚のシートを無だにしても、50枚や100枚はすぐ無だになり、たちまち消耗品費がお手挙げになつてしまう。

材料用戸だなの附近に T P 用複写機が設置できれば更に申し分はない。

(5) 教職員の啓もう

イ) 教師の姿勢

教育の現代化が叫ばれて久しいが、教育内容がどんどん改善されているのに、教育方法のみが旧態依然とした黒板とチョークだけに止まつてよいはずがない。教師は時代に遅れてはならず、そのために井の中のかわずであつてはいけない。教師は次代を背負う青少年を育成しているのである。未来に目を向け来るべき時代を察知し、そこに生きる人間を育てなければならぬ。その意味においても、大いに教育方法の現代的手法とも意欲的に取り組み、他に遅れをとらないよう努力すべきである。

ロ) 先進校に学ぶ

文部省が昭和44年から教育機器研究指定校を置いてから、各都道府県や各地域にこの面の研究実践校が置かれ、それらの先進校では相当進んだ研究や実践が積まれている。また年に1回はNHK 全国放送教育研究大会も実施されている。この面の先進校へ毎年2~3名の中堅的立場の教師を派遣し研究を積ませて、校内におけるリーダーを養成することも大切である。

ハ) 校外研修の機会をとらえる

教育機器講習会や研究会、公開授業等にどしどし参加させ、それが単に参加者だけの研修に止めず、必ず校内研修の機会をとらえて、全職員に伝達講習を実施するというシステムにしておくことよい。また1人の教師の転任により、軌道に乗りだした研究実践が止まることのないよう、後継者の養成についても充分の配慮が必要である。

以上いろいろと述べたが、各学校の事情もあり、問題点も数多く含んでいる。この分科会で大いにご批判をされ、討議・検討していただければ幸いです。

ロ) 組織の確立と人材の配置

努力目標に明記した以上、その達成に向つて全職員の取り組みが必要になる。といつても管理職が陣頭に立つて無理矢理引つぱつては絶対円滑にはいかない。職員がやらされているというイメージを持つようでは持続しない。だからといつて1人の教師がいくらあくせくしても他の大多数の者から浮き上つていたのでは効果は望めない。その為には研究組織をつくり数人を企画運営に参加するようにして、そのリーダーには意欲と人望を備えた人材を配置して、全校挙げて取り組める体制づくりが必要である。

ハ) 生徒も組織の中に参加させる

OHP / つにしても利用しようとするは大変である。TP の作成から、OHP や移動スクリーンの運搬、そのセッティング、終了後の片づけ、再び運搬・収納に至るまで、しかも10分間の休憩時間になると、考えただけで使うのがいやになる。さりとて生徒に勝手にやらせると無責任になり、取り扱いをあやまつて故障が多発する原因になる。そこで生徒会の組織の中に機器部(仮称)のような専門の係をつくり、機器取扱いについて充分指導すれば、運搬・セッティングだけでなく、ミラーふきやランプの取り替え等、簡単な清掃・補修・管理まで生徒は積極的にやつてくれる。

二) 予算面

需要費にも限度があり、設備にも基準がある。この度の改訂で大分増えたとはいえ、未だ充分とはいえない。活用が盛んになるにつれて、極力基準に到達するまでは計画的に必要な度の高いものから備えたい。特にソフト面は年度当初に予算を立て、その範囲内では係教師の裁量によつて計画的かつ効果的に自由に運用できるようなシステムにしないとスムーズな運営がやりにくい。機器教育が軌道に乗ると、消耗品関係にも予想以上の多額の出費が必要になる。しかし真の教育には金がかかるものである。教師が意欲的に取り組もうとするならば多少他の面をきりつめてでも、その面に重点的に出費すべきであろう。

機器教育を盛んにする為には、最底限各教室に巻き取り式の固定スクリーンと、前の窓の一部に暗幕の設置、そしてTP作成用の複写機1台はぜひ欲しいものである。

(3) 校内研修の取り組み

イ) 機器を有効に導入した研究授業の計画的実施

「教師は授業で勝負する」、よく聞く言葉である。しかし、授業の公開をいやがる教師も数多い。自分より未完成な生徒を相手に我流の授業を最良と心得、自己満足に陥っている教師は以外に多いのではなかろうか。教師はもつと恥を恐れず、謙虚になるべきだ。それが真の教師として成長し

得る道である。

機器活用の輪を広めるには、使わざるを得ない状況を設定することも1つの方法である。研修部等が学校の実状に応じて企画立案し、年間を通して計画的に実施したいものである。大規模校では教科別とか、中・小規模校では学年別とか全校職員が参加して行うとか。機器を効果的に利用した授業と決めて実施し、その後参観者全員集まって研究討議すれば、実のある校内研修になる。この積み重ねが機器の特性を生かした授業の創造へと発展し、授業改善につながる。またこれによつて機器アレルギーの教師にも一度使つてみようかという気持ちを引き起こさせることができる。

ロ) 教案のフローチャート化

公開授業をするには指導案が必要（毎時間腹案は必要だが）である。その度に正式の指導案を作成させたのでは持続しないばかりか、拒否反応さえ起る。そのために校内研修の指導案は従来の記述式よりも、工学的手法の「流れ図」型式の方が好ましいと思う。各学校で使用記号さえ統一しておけば授業の流れ通りに至つて簡単に書けるし、修正もしやすい。その上即時評価（チェック）やフィールドバックの回路やその手だても明確に表示できる。

ハ) 機器取り扱いの基本操作や資料作成技術の研修

資料作成といつても OHP の TP と VTR の録画位のものである。TP 作成法にも種々あるが、はじめは手書き上の留意点と複写法（トラペンかコピーの簡単なもの）位で、TP も簡単に作れるという認識を与えることが大切であり、高度なものは徐々に各自の研究と創意に待てばよい。VTR の録画もそう複雑ではないが、中には機械に弱い人もいて、高価なものにさわつて故障させると大変と始めから触れようとしなない人もいる。録画位は係教師が一手に引き受けて責任を持つのがよからう。こうなると自動録画が1週間前からセットできる時計もぜひ欲しいものである。

OHP の構造は簡単であるが、学校によつてはいろいろな機種が入っている。球が切れても取り替えもできないでは困る。高熱のまま移動するとフィラメントが切れやすい等、最底限 OHP・VTR の再生・スライド・映写機位について操作技術やセッティングの留意点等の校内講習会は実施したいものである。

(4) 手軽に利用できるために

機器の活用を図るためには前述のように、いつでも・どこでも・だれにでも・手軽に利用できることが第一条件である。そのための配置に関して私見を述べる。

第14回 全国バズ学習研究集会

“ひとりひとりの児童が主体的にとりこむ学習指導の創造”

＝ 算数科の教育実践から ＝

兵庫県姫路市立安室東小学校

小林 靖子

＜研究主題とその要旨＞

- ・ 学習の主体が、ひとりひとりの児童であることを再認識すると、ともに、基礎的・基本的事項（① 知識・理解事項， ② 見方・考え方， ③ 技能事項）の定着を図り、学習集団の中で児童の新しい能力や資質を伸ばし、自ら学ぶ態度を育成する。

＜研究内容＞

- ・ 数の概念，計算の原理・法則，図形概念，測定の原理など、すなわち、もとになっている考え方を理解することによって、子どもたち自らで算数をつくりあげていく力を日々の算数科学習の中で身につけさせる。換言するならば、教科としての算数・数学科は、より系統性の強い教科であることから既習事項が学習を成立させる前提となることは自明のことである。したがって、日々の算数科の学習の中で、ひとりひとりの児童が既習事項をもとにして、学習課題に対し多面的な考えを出し合い、吟味し、数学的により価値の高いものを学習集団の中で決定していくような算数科の学習を創造したい。

その為、次の項目について、校内で共同研究を進めている。

- ① 学習内容に対する基礎的・基本的事項の究明とその定着。
- ② 主体的に学習させるための学習課題・学習過程・学習形態・学習教具、具とその効果的な位置づけ。
- ③ 即時評価による指導計画の手直しと学習内容の定着。
- ④ 人間尊重の基盤にたった学習集団の育成。

問題提起

1. 学習内容に対する基礎的・基本的事項とその定着。
 - (1) 学習指導を前提とした算数科の基礎学力
 - ①知識・理解事項
 - ②見方・考え方(数学的思考方)
 - ③技能事項の3つの観点でおさえる。(具体例は別紙)
 - (2) 事前調査と習得。
 1. ①の①、②については、2~3日前にできるだけ手軽な方法で調査、指導
 1. ①の③(特に計算技能)については、学年頭初より継続的に指導 (別紙)
2. 主体的に学習させるための学習課題の設定。
 - ・ 児童の実態と学習目標から導入問題を吟味し、学習課題へ発展させる。
 - ・ 課題は、目標に必然的に到達し、多面的な考え方のできるもの。(別紙)
3. ひとりひとりの児童を主体的に学習させるための学習過程と学習形態。
 - ・ 学習は、発見的に組み、数理をみつけ、つくり出す態度を育成する。
 - ・ 参加度を高め、より質の高い学習にするために、目的を明確にした小集団バスを位置づける。(別紙、指導案参照)
4. 教育機器の位置づけ。
 - ・ 学習をより効率化、高質化するために、いつ、どのようなものを、どんな方法で利用するか。(教育機器のむっ、メリット、デメリットと考慮して...)
5. 即時評価による指導計画の手直しと学習内容の定着。
 - ・ 第1時は、第2時の前提となる基礎学力であり、第5時のそれは、第1~第4時までの学習内容であることから、毎時間の最後に小テストを位置づけ、児童の理解度やつまずきを知り、復習バス等を補うようにしている。
6. 人間尊重の基盤にたつた学習集団の育成。
 - ・ より教育的に価値の高いものを(わかりやすく、かんたんに、よく使えるもの)発見するという共通な目的をもち、支持的風土のある集団の育成。

基礎的学力を身につけるための学習方法を考える一つの視点

愛知県春日井市立松原中学校

赤羽 寿行

● 研究主題とその要旨

多くの子ども達のなかに「学力が身につけていけない」という状況が目立つてきている。知識を覚えても定着しない、蓄積していかない、たとえ知識を覚えても思考力、分析総合力の基礎となるような知識の定着のしかたが極めて脆弱だと思われるし、また学年の進むにつれて以前に学習したことが消え去つてしまつて、知識が血肉の一部となっているような生きた学力にはなりようもない状況も多い。

そのような状況のなかで、学力を身につけていくための学習方法をあらためて論じ直すことは意味あることと思う。

しかしながら、いろいろな疑問もでてくる。「学力が定着、発達していく」とはどんな状況であれば、そういえるのか。それに、「基礎的」な「学力」とはどんな性格と内容のものなのか。

また、この分科会名が「基礎的学力、体力の定着」と名づけられているが、学力と体力とは同じ性格、構造の能力と理解してよいのか、違つて理解すべきなのか。

学力を身につけさせていくための学習方法にしても、単に反復練習をくり返して習熟させていくやり方の技術的工夫をすることだけではあるまい。

「好ましい人間関係を基盤としたひとりひとりの学習が成立していける状況」作りが必要であろうし、何よりもまず、「教師の密度のこい授業の創造」が前提となろう。

このようにあれこれ考えてみると、この研究主題の要旨をどう理解すればよいのか、判然としなくなつてしまう。私なりの理解のしかたで問題提起する以外にない。

● 研究内容

この主題に対して、私の関心は多様な内容にわたる。私は社会科を教えているので、社会科における基礎的学力のなかみは何か、学習活動でのことはの役割、学習ができなくなる理由、学習ができるようになる条件、ひとりひとりの学習の成立状況の究明、学力が獲得され定着し、発達していく過程の実践的解明等である。

これらは日常の実践のながで、たえず、くりかえし、同時併行的に頭をもたける問題意識である。だが、すべてを研究対象にしていく力は、私にはない。

今は、学力を身につけていく過程での「ことは」の役割を究明することを中心に据え、付随的にからみ合つて出てくるであろうその他の問題についても「ことは」の問題と連関させながら、考えていきたいと思う。

● 問題提起

1. 基礎的学力の定着していないと思われる低学力の子どもは、学習の場で自分がしゃべることにも不得意だが、ひとのことは話をきちんときくことができない場合が多い。

先生や友達のことはきちつと心でうけとめてきく態度を訓練していくことは、基礎学力定着のために最も土台になる指導のなかみでないのか。またそうした態度も基礎学力の一部に含められるその子どもの学力といえないか。

いや、そのような心や態度とかを学力のなかに含めることは、学力の科学性をあいまいにするから誤りだとするべきだろうか。

2. ひとのことはきちつときくこと、また自分の問題をこぼを通してひとに語ることは、その子どもの学力の定着と発達にどんなねうちがあるのか。

こぼを単に伝達の手段にしてしまつてはならないと思う。自分の問題をこぼにしてひとにきいてもらうことは、問題をより明確化し、対象化していくことによつて、自分の思考を深め発展させ、自分のものを生みだしていく契機になつていくことを私たちは経験で感じている。

そのようなこぼの交流を学習の場で計画的に組織していくこと(バス活動)の有効性をむつとはつきり実証的に解明していくことが必要ではないか。

また、ひとの話を正確にきく、ひとの話を自分の思考活動のなかにとりいれていく能力が自分の話す力のささえになっていくことがあつてこそ本当の基礎学力といえるのではないか。

3. 高学力の子どもが巧みなしゃべり方をしても、自分の感動がこめられていなく、概念的なこぼの連なりにしからずきないという場合によく出合う。また、一つ一つの事実の知識を覚えても、その事実を相互に関連づけ、意味づけながら課題にとりくむ力の弱い子も目立つ。

感動がなくても、こぼは知識内容を伝えていくだろうし、学力形成の一部となつていく。しかし、そのようにして伝えあい、覚えた知識の集積としての学力を本当の学力として評価してよいのだろうか。

「学力差」というが、できる子とできない子の差は、どんな内容と尺度によるものなのか。

以上の三つを問題提起したい。

第 14 回 全 国 パズ 学 習 研 究 集 会

「数学の基礎計算力をどのように定着させるか」

兵庫県姫路市立東中学校

堀 義 明

1. 研究主題とその要旨

算数・数学の基礎計算のつまずき発見テストを実施し、その結果を個人得点票に記録させ、それに基づいて各生徒に合った事後指導をおこない、基礎計算力の定着を図っている。

2. 研究内容

(1) つまずき発見テストの作成

- ・各学年の学習指導要領と教科書を基礎資料とし、つまずき箇所が明確に判断できるように配慮する。
- ・テストは10題で、小学校課程が19項目、中学1年の課程が12項目、中学2年の課程が7項目、中学3年の課程が4項目の計42項目である。

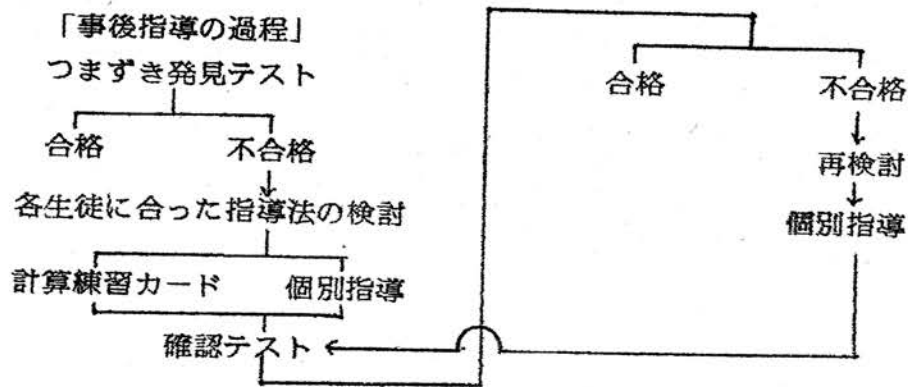
(2) つまずき発見テストの実施

- ・テストは6校時終了後直ちに実施し、学年によってテストの回数が異なるので、期間だけを定めておく。
- ・6校時終了——→教室の移動時間(5分間)——→テストの準備
テスト(10分間)——→解答回収——→清掃学活
「回収・集計は数学委員が行う」

(3) テスト結果の分析と事後指導

小学校課程の集計から、「整数計算の中でも除法・四則混合は苦手。分数より小数の方がわかり易い。単位や比と比例はきれい。」という生徒が予想外に多い。中学校課程においては正・負の数の四則混合、文字式、求積等抽象化されたものが苦手である。(図参照)

事後指導に入る前に、つまずいている生徒に対して差別的な発言や行為がないように、本当の学力とは何であるかについて考えさせる。また、仲間同志支え合っていくことが学級をよくし、自分自身をも高めていくことに気づかせる。そして、ひとりひとりが基礎学力をしっかりと身につけていくような生徒を育てていきたい。



事後指導の取り組みはテスト項目の分類に挙げてある42項目を、各項目ごと4段階（比と比例は8段階）に分けた計算練習カード（表には10問題、裏には解答）/72種類を、けた箱を利用した整理だなにに入れて校舎の1階に置き、生徒が、いつでも自由に借り出せるようにした。（貸出期間は3日以内）指導方法は毎週水曜日の第7校時に、学年ごとに数学担任だけでなく、学年所属の教員全員で計算カードを使って指導している。10～15分間の一斉指導で解答や誤答し易い箇所を指導した後、学年の教員で更に個別指導を行い、確認テストに合格すれば次に進むというシステムをとった。そのうち、指導が進むにつれて進捗が乱れ、項目ごとに対象生徒の数にばらつきが目立つようになった。そこで、教員の手だけではだめであるので、「班学習」形態と、マンツーマン方式を取り入れ、「親（補助生徒）・子（対象生徒）学習」形態で行うことにした。この2つは、何れも生徒が生徒を補助する学習形態なので休憩時間や放課後に学習する風景が見られるようになり、「仲間意識」を育てることにも大きな効果がある。定期考査の前になると、その準備に借りて帰る生徒もいて、かなり混雑することもある。学習への意欲づけが、学習効果を上げる原動力となることは言うまでもないが、その面で、カード方式の採用は大いに役立っていると自負している。今後とも、この教育実践を大切にしていきたい。

3. 問題提起

- (1) 事後指導の時間として、毎週水曜日第7校時を補充学習の時間と定め、指導しているが課外活動、学校行事、出張等の関係で計画通り実施できないことがある。
- (2) つまずき発見テスト・確認テストにおいて、充分時間を与えれば正解を出すことのできる生徒もあると思われるが、時間を制限して実施することの良否

第14回 全国バス学習研究集会

ゆとりのある充実した学校生活をめざして

—— 仲良し時間の活用実践から ——

春日井市立藤木小学校

加藤 一成

<研究主題とその要旨>

昭和45年からの新教育課程への移行の一端としての学校裁量時間を本年度、「仲良し時間」と名付けてその計画実践の中程報告を下記に示す。

テーマの設定にあたって

- ・現行授業時間はそのままにして、新教育課程への移行しつづき余剰時間は、充実、補充にあてる。

<研究内容>

「ゆとりと充実」に関する指導の計画

○ ねらい

- ・児童と教師、児童相互のふれ合い時間を多くし、望ましい人間関係を深める。
- ・学級会、児童会活動を活発化し、児童の自主、自発的活動を重視することにより、個々の能力を高める。

○ 方法

- ・ねらいに沿って学級学校づくりを中心に活動する。
- ・「なごよし時間」の名称のもと、月・火・木・金の4日間、清掃30分時間を取り、指導する。
- ・月曜日は、児童会を計画した全体会、残り3日のうち1日は学年、残りの2日を学級を利用する。

・運動場、体育館、なごよし広場の使用日

・火曜日 ————— 1・6年

・本曜日 ————— 2・4年

・金曜日 ————— 3・5年

○「ながよし時間」に取り入れる主な内容 (年間計画省略)

・1学期 ————— 学級づくり

・2学期 ————— 音楽会に向けて

・3学期 ————— 体力づくり

○その他

・学年、学級の活動計画を表に記入し、内容の精選を図る。

<実践内容> 4年の実践から

○学年単位のもの (学校行事も含む)

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
内 容	学級づくり	ドッジボール大会	読書コンクール	アマタキ草 コンクール		運動会準備練習	音楽会練習	読書コンクール	球技大会 タコ上げ大会準備	なわとび タコ上げ大会	卒業生を送る会 持久走	持久走

○学級単位のもの

・ゲーム、グループ学習、読書、ながよし広場での体力づくり、

ドッジボール、ソフトボール、ポートボール、写生 など

<問題提起>

1. 大規模校で実施するにあたっての施設、時間配当などどうすればいいの。
2. 「ながよし時間」の取り入れ方は、現行のやり方では十分消化されない場合があるので、まとめて取り入れる必要があるのではない。
3. 「ながよし時間」を設定するにあたっての教師、児童の負担。

第 / 4回 全国バス学習研修集会

「ゆとりのある充実した学校生活をめざして」

—ゆとりとるおい・業間体育—

姫路市立御国野小学校

田 中 雄 介

＜研究主題とその要旨＞

本校は、昭和51年より児童の実態から「動くことの好きな 体力づくりを自らやっけていける子の育成」を研究テーマとして体力づくりの実践にとりくんできた。体力づくりをすすめるには、教科体育の時間だけではじゅうぶんな効果をあげることはできない。そこで業間体育・課外での多様な遊びや運動に挑戦することから、児童の日々の生活に、変化と楽しみをもたせながら体力増進を図っている。

子どもの生活、それは「遊びであり、運動である」といわれている。従って、この遊びや、運動が思いきりやれなくては、ゆとりのある学校生活は実現しないと考えるよい。かような観点から、業間・課外の時間は、その遊びや、運動を通してゆとりのあるしかも充実した学校生活を実現する有効な時間帯である。

＜研究内容＞

1. 業間、課外での動きづくり

A 始業前 朝の「あそび」

- ◆ 児童の意志に基づく 自由なあそびが中心
- ◆ 体力づくりの新しい側面（社会的なひろがり）を考慮し

学年縦割りにして町ごと（通学班）のあそびを継続実施する。

B 業間体育 第2校時と第3校時間の25分間

- ◆ 対象 全学年 毎日
- ◆ 月、水、金、 教師の指導性を強く出す。教師も児童と共にあり、その時々で新しい動き、運動のしかた、あそびを知らせていく。
- ◆ 火、木、土、 自由な運動、あそび
- ◆ ねらい

(1) 体力づくりの生活化を図る。

すべての子どもにとって遊ぶこと、動くこと、運動することは、それ自体が楽しいこと、うれしいことである。自主的・創造的な遊びや運動を十分に楽しみながら、しかも子どもたちの心身が健やかに伸びていってほしい。

(2) 仲間づくりの場とする。

全校生・全教師 運動場で共に、動き、体に汗。集団の和、信頼、親睦を深めあう。男女、学年クラスの別なく、みんなで協力しあうことの大切さを学ぶ場でもある。

(3) 施設・用具をじょうずに使い、楽しく遊ぶ。

安全に楽しく遊ばせ、運動させる。

- C 放課後
- ◆ 自由遊びが中心。
 - ◆ 児童活動とタイアップ
 - ◆ 原則として、全員が遊びや運動をした後下校。

2. クラブ活動と体力づくり。
3. 学校体育的行事の充実。
4. 固定施設、遊具の利用と工夫。
5. 6. 7. (省略)

<問題提起>

1. ゆとりと充実をめざす学校生活設計は どのように立てればよいか。
2. ゆとりある教育を推進するための問題点。
3. ゆたかな人間性を育てるために、学校(担任)と家庭(地域)との考え方のズレに、どう対処していくか。

第 / 4 回 全国バズ学習研修集会

「ゆとりのある充実した学校生活をめざして」

—ゆとりとうるおい・業間体育—

姫路市立御国野小学校

田 中 雄 介

<研究主題とその要旨>

本校は、昭和51年より児童の実態から「動くことの好きな 体力づくりを自らやっけていける子の育成」を研究テーマとして体力づくりの実践にとりくんできた。体力づくりをすすめるには、教科体育の時間だけではじゅうぶんな効果をあげることはできない。そこで業間体育・課外での多用な遊びや運動に挑戦することから、児童の日々の生活に、変化と楽しみをもたせながら体力増進を図っている。

子どもの生活、それは「遊びであり、運動である」といわれている。従って、この遊びや、運動が思いきりやれなくては、ゆとりのある学校生活は実現しないと考えるよい。かような観点から、業間・課外の時間は、その遊びや、運動を通してゆとりのあるしかも充実した学校生活を実現する有効な時間帯である。

<研 究 内 容>

1. 業間、課外での動きづくり

A 始業前 朝の「あそび」

- ◆ 児童の意志に基づく 自由なあそびが中心
- ◆ 体力づくりの新しい側面（社会的なひろがり）を考慮し
学年縦割りにして町ごと（通学班）のあそびを継続実施する。

B 業間体育 第2校時と第3校時間の25分間

- ◆ 対象 全学年 毎日
- ◆ 月、水、金、 教師の指導性を強く出す。教師も児童と共にあり、その時々で新しい動き、運動のしかた、あそびを知らせていく。
- ◆ 火、木、土、 自由な運動、あそび
- ◆ ねらい

(1) 体力づくりの生活化を図る。

すべての子どもにとって遊ぶこと、動くこと、運動することは、それ自体が楽しいこと、うれしいことである。自主的・創造的な遊びや運動を十分に楽しみながら、しかも子どもたちの心身が健やかに伸びていってほしい。

(2) 仲間づくりの場とする。

全校生・全教師 運動場で共に、動き、体に汗。集団の和、信頼、親睦を深めあう。男女、学年クラスの別なく、みんなで協力しあうことの大切さを学ぶ場でもある。

(3) 施設・用具をじょずに使い、楽しく遊ぶ。

安全に楽しく遊ばせ、運動させる。

- C 放課後
- ◆ 自由遊びが中心。
 - ◆ 児童活動とタイアップ
 - ◆ 原則として、全員が遊びや運動をした後下校。

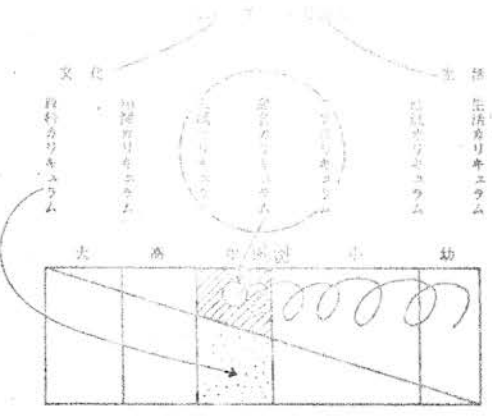
2. クラブ活動と体力づくり。
3. 学校体育的行事の充実。
4. 固定施設、遊具の利用と工夫。
5. 6. 7. (省略)

<問題提起>

1. ゆとりと充実をめざす学校生活設計は どのように立てればよいか。
2. ゆとりある教育を推進するための問題点。
3. ゆたかな人間性を育てるために、学校(担任)と家庭(地域)との考え方のズレに、どう対処していくか。

(2) カリキュラム論からのアプローチ

教科カリキュラムは文化遺産を系統的に学ぶことができ知的な能力を伸ばしやすい反面、知育偏重になりやすく学習結果の統合がむずかしいために、教科学習だけでは今日の社会の問題を解決するだけの能力が伸ばせないという欠点がある。断片的な知識や技術を統合する必要がある。



(3) 統合コースの目標と性格

目標

- (1) 生活の場に生きる統合能力を身につける
- (2) 自らの価値観をさぐっていく。
- (3) 自主的活気の喜びを味わう。
- (4) 生涯学習のきっかけをつくる。

性格

- (1) 本校教育課程の中に一領域として位置づける。
- (2) 知能をひらく教科と互助の関係にある。
- (3) 内容が数教科にまたがる。
- (4) 生徒の自主性・創造性を重視する。
- (5) 教科・学年・学級の枠をはずす。
- (6) 意欲を伸ばす学習活動である。
- (7) 一人ひとりが単位となる。

(4) 統合コースの授業時間

本校では2週間単位の時間割を採用しているが、土曜日の四時間、二・三年は一週目統合コース、二週目平常授業、一年は一週目は二・三年と一緒に統合コース、二週目はオープンクラスとなっている。

2週間単位授業時数

		1年	2年	3年
国語	社会	10	9	10
社会	学	8	8	8
数	理	7	8	8
理	科	6	7	8
音楽	美術	4	4	3
美術	体育	4	4	3
技術・家庭	英語	6	8	7
英語	総合	4	5	6
総合	特別	7	8	8
特別	生活	2	2	2
統合コース		2	1	0
オープンクラス		4	4	4
オープンクラス		4	0	0
合計		68	68	68

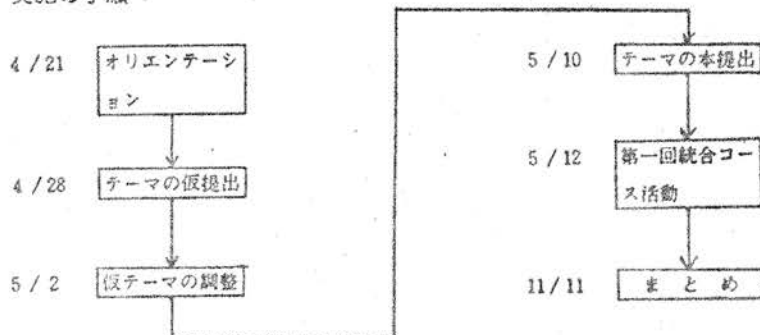
(5) 意欲を高める五要素

- (1) 「楽しむ」 達成感、成就感、熱心さetc
- (2) 「助けあう」 思いやり、協力する、調和etc
- (3) 「工夫する」 創造する、向上心、計画するetc
- (4) 「耐える」 最後までやりぬく、苦しきから学ぶetc
- (5) 「冒険する」 新しいことに立ち向かう、自主性etc

(6) 統合コース運営上の約束

1. 教科主導型ではなく、学年・学級・教科のわくをはずす。
2. 特設のコースは持たないが、生徒の希望によっては公開講座や校外学習を設けたりする。
3. 行事的に展開できるものは集約し奨励する。
4. テーマによってはある程度引っぱることがあるが、あくまでも生徒の自発的な行動を期待する。
5. 隔週土曜日を統合コースの活動にあて、準備を徹底する。
6. 生徒のスケジュールは全教師によって調整され、周知徹底される。
7. 生徒は個人又はグループで計画を立て、先生の承認を得た上でプランに従い行動する。
8. 教師はアドバイザーとして位置づけ、テーマに従って生徒が必要な資料や助言・評価を先生のところにやって来て求める。
9. 全員の教師で指導に当たるが、場合によっては外部の力を借りることもある。
10. 教師は所在あ明らかにし、生徒と共に行動する。
11. 校外に出る時は朝のH、Rで担任に申し出て許可を受ける。必ず引率者が付き、一時期に集中しないようにする。
12. 朝・終礼と清掃は学級単位で行なう。
13. 予定したプランが実行されている証拠として、教師は生徒と接触することにカードにサインする。
14. 必要経費は原則として各自で負担する。
15. 活動のまとめは文化発表会で展示や舞台発表その他の方法で参加する。

(7) 実施の手順



(8) 統合コースと行事のつながり

(9) 昭和54年度総合コース活動状況

教師名	内 容	教師名	内 容
小島副校長	○産の研究	鈴木	○楽器に親しみ (等・バンジョー・ギター・アコーディオン・チェロ・バイオリン) ○楽器製作(ギターを手作り) ○アンサンブル ○シンセサイザー演奏 ○超心理実験 (選択について・催眠術について・E・S・Pカード じゃんけん)コックリさん・キュービッドについて等)
磯野	○放送劇制作(「二つの地球」) ○郷土と古典(平家物語から) ○古典研究(その現代的意義) ○小説制作 ○人形劇制作(「つる」) ○舞台劇制作(「明るきの陰に」) ○童話制作		
黒坂	○影絵劇制作 ○詩・童話制作 ○古典研究(百人一首・今昔物語等) ○文学研究(ヘッセについて) ○ギター	速坂	○人形劇制作 ○アニメーション制作 ○絵本をつくる ○組立式レイアウト ○Nゲージ鉄道模型 ○テリオラマ制作 ○やきもの ○絵画(油絵)
谷村	○ラテン・アメリカについて ○フランス人の生活と習慣 ○インドについて ○ギリシアの研究 ○明治時代における平民の立場 ○日本とアメリカの政治について ○日本とフランスの政治について ○明治時代の歴史 ○昭和史研究		伊藤 泉山 中田
中川	○鉄道の研究 ○各国の軍事力 ○明治について ○明石城について ○南アメリカについて ○北・中央アメリカについて ○ヨーロッパについて ○ドイツについて ○郷土の研究	藤野	○電子工作(トランジスタ・コントローラ、アンプ、 マイク、T・Vコンバータ、ラジオ、インターホン、 デジタル時計、感光プザー、スピーカ、チューナー、 指切警報装置、ポータブル赤道儀等の製作) ○映画づくり ○自動車の研究 ○紙飛行機の研究
	古館		○図形と関数の関係 ○四次元の世界 ○数学史 ○エピクロス思想について ○三平方の原理・ヒコーキの飛び原理 について
赤澤	○マイコンのプログラミング (教あてゲーム・レクリエーションゲー ム・三光一次方程式等)	柴本	○歌・童話と英語 ○Akashi & Our School (スライド制作) ○アメリカ・インディアンの研究 ○英文法と時事英語 ○物語の和訳(絵本に)
萩原	○四季の気象	倉橋	○各種工作 ○植物の栽培・文化・地理等の比較 ○英文作品の和訳 ○日本童話の英訳 ○紙芝居づくり
関	○植物と文学 ○星座の研究 ○岩石薄片 ○植物採集 ○花粉図鑑の作成 ○川の水の化学分析 ○川の微生物 ○ダンゴムシの行動観察 ○微生物図鑑の作成	松本	○紙芝居について ○ドイツ語研究 ○手話(手話を理解し、福祉を考える) ○ドイツについて
		五十嵐	○校外活動の引継(可能なものに限る) ○活動内容に対する指導助言 ○その他 カウンセリング
		全員	

(10) 成果と課題

第14回

全国バス学習研究集会

ゆとりのある充実した学校生活をめざして

姫路市立山陽中学校

森本正雄

< 研究主題とその委旨 >

1 研究主題

移項措置期間として、新学習指導要領の「ゆとりの時間」をどのように運営していくか。

2 委旨

改善のねらいは、「自ら考え正しく判断できる力をもつ児童・生徒の育成ということと重視しながら……①人間性豊かな児童・生徒を育てること。②ゆとりあるしかも充実した学校生活を送れるようにすること。」とある。本校ではこのねらいを生かし、教育目標の「楽しい学校」、「伸びる生徒」づくりを、親のねがいや、生徒の実態を把握しながら「ゆとりの時間」を職員の協力をえて運営を試みる。

< 研究内容 >

1 本校の授業日数と行事日数。(各教科週時数は従前通り)

(1) 授業日数 1年 241日・2年 242日・3年 236日。

(2) 学校行事日数 28日

余裕日数は数日で臨時学校行事を考慮すると、「ゆとり」の時間を特設できない。しかし移項措置期間として、週2時間程度は「創意工夫の時間」とすることを決定した。当然のことながら各教科時数が減ってくることを予想して、各教科8時間程度の内容の精選をはかった。

2. 本校の実態 (調査)

(1) 保護者のねがい。

ア. どんな人間になつて欲しいか。

素直・正直 46%で最も多く、迷惑をかけない人間・責任ある行動をする人・思いやりのある人間・健康な人・明るい人・判断力のある人・礼儀正しい人。

イ. どんな職につけたいか。

本人に適性を職業 25%・公務員・サラリーマン・技術を身につける・教師・保母・店を持たせる。

(2) 生徒の実態

ア. 学校が楽しいか。

楽しい 30% 理由 友達 27%・クラブ・先生・教科

楽しくない 8% 理由 友達・教科

イ. 困っていること。

学習 69%・友達 21%・クラブ・塾・家族のこと・身帯のこと。

ウ. 趣味

レコードを聞く 25%・スポーツ・読書・フリ・手芸・マンガ・木工

エ. 勤労

何かに興味をもちつもの 88%・働くこときらいとみられるもの 6%

オ. 基本的生活習慣ができていない。

暴力行爲をする生徒・言葉使いが悪い生徒・授業を受けない生徒・服装の違反者が多い・清掃をしない生徒・遅刻早退をする生徒・喫煙する生徒

(3) 分析と判断

ア. 一部の生徒であるが基本的生活習慣ができていない。

イ. 保護者のねがいは、反抗期にある中学生を対象としてはいるが、素直で明るい人間を求めている。当然のこととして人間らしい思いやりのある豊かな情操をもった人間像を求めていると思われる。将来の進路についても生徒の適性・能力を考慮した選び方である。

ウ 昨年度の職業の一致した努力がみのつてが、学校が楽しいという生徒が30%で、楽しくない生徒が少ない。しかしその原因は友達ということであり、低位の考えに基づくものが多い。ゆえに正しい友人関係を育てる必要がある。楽しくない理由に学習があることは教師として放置できない。わかる授業の創造の研究と同時に、原因を把握し取り除く努力をする。

エ 勤労に対する意欲が見られない生徒がいるが、集団の中での責任感や、感謝の心がないためと思われる。集団訓練の中で自覚させる。

オ 趣味・同好の活動については、来年度の計画に加える。

3. 本校の「ゆとり」の時間のねらい。

- (1) 基本的生活習慣を確立する。
- (2) 楽しい学校生活とする。
- (3) 生徒の自主的活動を育てる。
- (4) 学業不振の原因を把握し除去する。
- (5) 集団活動の中で友情と思いやりの心を育てる。

4. 本年度「ゆとり」の時間と内容の計画 (77時間)

- | | |
|------------------------|------------------------|
| (1) 合宿訓練 (5月) 24時間 | (2) 教育相談 (6.9.2月) 18時間 |
| (3) 球技大会 (7月) 6時間 | (4) 体育大会練習 (9月) 12時間 |
| (5) 学芸発表会練習 (10月) 12時間 | (6) オルタ会 (1月) 3時間 |
| (7) マラソン大会練習 (1月) 2時間 | |

5. 時間の運用

固定週時間割りであるが、「ゆとり」に使用した時間はその都度2時間・4時間・1日単位で変更し平均化をはかっている。

6. 展開例

(1) 合宿訓練 (実施場所-兵庫県美才郡淡坂町諸寄)

ア. 課題 ①共同生活を通して規則を守らせる。②集団の中で自分の責任を果させる。③辛抱することを体験させる。④連帯感を養い皆んなで解決する習慣をつける。⑤人々や物のお蔭を自覚し、感謝や奉仕の心を育てる。

イ. 計画 ①クラス班別け ②事前指導の討議(服装・集合・合宿内・車内・船内マナー・部屋割・食卓割・歌集・しおり作成) ③1人1役(集合係・美

化係・学習司会係・記録係・保健係・食卓当番・朝の体操係・入浴係・レクリエーション係) ④日程づくり(教師・班長)

ウ 討議 (基本ルール等は事前指導)

①学習の意義(何のために勉強するのか・どんなよいことがあるか・どんな人になりたいか、学校と家庭での学習の違い) ②明るく楽しい学校生活(正しい生活習慣・規則正しい学校・きまり以上のものは何か奉仕・感謝・よりよい学校づくり) ③あたたかい人間関係(学校生活での悩み・友人・上級生・異性・進学・悩みを誰れに打ち明けるか・真の友情とは)

(2) 教育相談 (一日教員担任による・担任以外の学年所属教師は質問受け)

ア. ねらい ①生徒を理解する。②悩みについて懇切に相談する。③1対1の生徒との人間関係のふれあいであるから、相互の人間性の理解と信頼感をあこさせる。④問題生徒については行動の原因についてきびしく話し下げる。⑤生徒の秘密事項は守る。

イ. 事後処置 ①学級担任処置。②学年処置。③学校処置。④生徒指導処置

(3) 体育大会練習

ア. 目的 ①集団活動の実践を通して、集団の規則・秩序を守る態度や基本的行動を身につける。②所属感・連帯感を盛りあげる。

イ. 実践 ①生徒会活動と軸としておしすすめる。②全職員で取りくむ。

7. 実践の結果の考察

①展覧の前にねらい・方法等を職員会で討議したことが、職員の共通理解を助け、効果をあげるのに役立った。②教師と生徒の人間関係が深くなり、教師の生徒を見る目が違ってきた。③非行が表面から消えつつある。④生徒の自主性が芽生えてきた。⑤教師が多忙となった。

< 問題提起 >

1. 「ゆとり」の時間も学校経営上評価する必要がある。どうして評価するか。
2. 学級・学年のわくを越えての「ゆとり」の時間に、生徒の希望・職員・施設をどう調整するか。

第14回 全国バス学習研究集会

意欲的に学習にとり組む子どもを育てる

愛知県豊川市立千両小学校
丸山正克

研究主題とその要旨

意欲的に学習にとり組む子どもを育てるためには、学ぶことの楽しさを味わわせることである。わかることの楽しさを体験させることである。これは、ヒリもなおさず「落ちこぼされてはいない」という意識が子どもの中にめばえてくることにほかならない。

子ども達が「もう一度やろう」「ちょっと待って、今、やっているから」「もう少し時間がほしいなあ」「この次の時間もやろう」等を、課題に与るとり組みの意欲が、何らかの反応として、子ども達の言動に現われてくることが不可欠である。

そのためには

- (1) 子どもを理解すること
- (2) 子どもに自分自身を見つめる目を育てること
- (3) 教師の評価と子どもの自己評価を一体化すること
- (4) 子どもの発想やスペースを重視し学習参加の機会を提供すること。
- (5) 子どもの学習の成果と課題にとり組んだ事実を認めてやること。

以上5項目に教師は常に意図的にとり組む必要があると考えている。これらは単独に要因として抽出し、分析的にとらえることは、日常実践の中では困難を感じるし、また、そのような性格のものでもないと考えている。むしろ、相補相乗関係にあって子どもの変容を促進するであろうと考えている。

このような発想のもとに、現在は、子どもをどう理解するか、子どもに自分自身を見つめる目(自己評価のしかた)をどう育てるか、また、その結果をどう授業の中に生かすのかということを中心に、研究的実践を試みている。今回は、その試みと現情の一端をまとめて問題提起に代えたい。

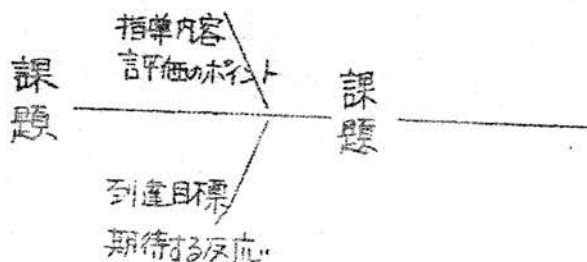
研究とその現情

<子どもの理解＝即時評価について>

授業で勝算するということが言われている。単位時間内に子どもを楽容させるとともに、子どもに成就の喜びを味わわせることを意味しているわけである。

そのためには、子ども何を期待するのか、また、子どもは自分達は何をし、どうなればよいかを知っていることが大切である。目標追求活動ができる場に置くことが必要である。そこで、自分自身の課題の設定、あるいは学習の計画を立てることが望ましいと考えてはいるが、現実には価値ある学習、あるいは、学習の効率などを考える時、そこまで子どもの手にゆだねることにはいささか抵抗を感じる。

そこで、期待する知識・能力を教材との係わりで吟味し、単元を基準に課題系列を考えて指導計画を立てる。しかし、この活動を日常化するためには、あまりにも時間的量的な制約、あるいは力量に左右されることが大きいので、中心的な部分についてのみに立案することになっている。また、そうすることが、子どもを理解し授業方略を変更することが容易であるということも経験的に言えるからである。



これは換言すれば、ねらい——評価の場と 結果——評価基準の設定ということにもなる。

<評価の手法>

ある特定の場を通して評価をするという方法もある。しかし、子どもひとりひとりを可能な限り理解してやるためには、個性的な活動を発見し強化してやるためには、理解の場を特定化することにはいささか異論がある。あらゆる場を通して子どもを見るべきだと

第14回 全国バス学習研究集会

意欲的に学習にとり組む子どもを育てる

愛知県豊川市立千両小学校
丸山正克

研究主題とその要旨

意欲に学習にとり組む子どもを育てるためには、学ぶことの楽しさを味わわせることである。わかることの楽しさを体験させることである。これは、とりもなおさず「落ちこぼされていない」という意識が子どもの中にめばえてくることにほかならない。

子ども達が「もう一度やろう」「ちょっと待って、今、やっているから」「もう少し時間がほしいなあ」「この次の時間もやろう」等を、課題に打ちまわるとり組みの意欲が、何らかの反応として、子ども達の言動に現われてくることが不可欠である。

そのためには

- (1) 子どもを理解すること
- (2) 子どもに自分自身を見つめる目を育てること
- (3) 教師の評価と子どもの自己評価を一体化すること
- (4) 子どもの発想やスペースを重視し学習参加の機会を提供すること
- (5) 子どもの学習の成果と課題にとり組んだ事実を認めてやること

以上5項目に教師は常に意図的にとり組み必要があると考えている。これらは単独に要因として抽出し、分析的にとらえることは、日常実践の中では困難を感じるし、また、そのような性格のものでもないと考えている。むしろ、相補相乗関係にあって子どもの変容を促進するであろうと考えている。

このような発想のもとに、現在は、子どもをどう理解するが、子どもに自分自身を見つめる目(自己評価のしかた)をどう育てるか、また、その結果をどう授業の中に生かすのかということを中心に、研究的実践を試みている。今回は、その試みと現情の一端をまとめて問題提起に代えたい。

考えている。

しかし 日常化するためには、特殊な技術や訓練を要する様な方法では無理が生ずるし、評価がおれになって評価の結果を指導に生かすことはできない。評価の即時性の意味も失われてしまう。

そこで、具体的には原則として次の様な方法をとっている

(1) 観察による評価

最も一般的な方法である。単位時間内に約40名の子どもを評価するという事は大変な仕事であるが、単位時間-項目とし、主として誤答を会話記録法に準じてメモするようにしている。

これは 評価の結果を指導に生かすということはどういうことかを考えてみると「できた、わかった」という満足感があるから、誤答の原因、つまり、学習の抵抗を除く必要があると考えたからである。

また、そうすることによって、子どもの特性をつかむことも可能であると考えたからである。

観察の場は①発表時②小集団による話し合いの時③個人思考をしている時であるが、比較的、③の場合が多い。

(2) 記録による評価

授業後ノートを提出させ、やはり、誤答を中心に評価をする。時には、ペーパーテストを分析することもある。

< 授業にどう生かすのか >

単位時間内に即時評価することの意義は、授業方略の変更という教師サイドの部分と、子どもにフィードバック情報を提供するという部分にあると考えている。

これは、同時に行う場合もあれば、一才だけに當る場合もある。しかし、どちらかと言えば同時に行うことが多い。

例 国語の学習で文の要約を課題にした時、評価の基準として、要約に必要なキー・ワードを決めておく

課題提示 —— 個人思考 (キーワードの出現をマーク)

- 作業の中断 — フードバック情報の提供
 「大事なことがあっあります。それが抜けていないでしょうか」
- 作業の再開 — チェック
 指導 話し合いによる情報交換 ヒント

<3> 「も」自分自身を見つめる目を >自己評価

師の評価の結果を指導の中で生かすためには、子ども達がそれを自分のものとして受けとめることができなければならない。つまり、情報をもとに自己評価できなければ、結果を生かすことの有効性は期待できないのではないかとということである。

のためには、教師の行なう即時評価の基準を子どもが知っている、言うことも必要である。ことに、練習学習ではその効果は大きい。

ex 笛の練習

- ・みんなと同じように、まちがわずに吹けた 5
- ・大体、同じ様にできたが、時々、まちがえた 4
- ・間違わなかったが、みんなと揃わない 3
- ・時々間違ったし、みんなとも揃わない 2
- ・途中までしかできない 1

また、あらゆる機会をとらえて、自己評価させる

ex 算数の学習をしたあと

「わたしは、問題をよく読まないからまちがえる。考え方がまちがってしまった。絵を書かないのでまちがえる。かけ算の時、1の位をくり上げてしまった」

こうした自己評価ができるようになるには、授業の中で評価の結果はこの子に非常に有効に働くものと考えられる。

評価の結果を着実に指導の中で生かしていくことは、常にフォローアップが必要であり、学校体制でとり組むことが大切であろう。

(紙面の都合で論旨が不明確になったことをお詫します。)

第14回 全国バズ学習研究集会

相互作用を生かした学習指導の研究

— 評価活動の実践を通して —

愛知県春日井市立西山小学校

斉木 秀弘

1. 研究主題とその要旨

この研究は、春日井市立高座小学校在職中の昭和50年度から昭和53年度までの4年間「相互作用を生かした学習指導の研究」— 課題と評価 — について研究してきたその中の評価活動の実践についてまとめたものである。

相互作用の研究にとり組んだ理由は、子どもたちに次のような教育的効果を期待してとりあげた。

- ・ 児童の参加度を高め自己実現の場を与える。
- ・ 学習内容の理解を促進し、深化拡充することができる。
- ・ 子どもたちの社会的態度の変化がより可能である。
- ・ 子どもたちに所属感を与えて人間関係のより一層の醸成をはかる。
- ・ 子どもたちの学習意欲を喚起し高めることが可能である。
- ・ 即時評価が容易であるため学習活動の効率化がはかられる。

この研究をすすめるについては、全職員が同じ研究のねらいをもち、同じ気持ちで学習理論を追求し、実践を積み重ねて取り組んできた。その中において学校教育体制の確立をはかってきた。

この研究を推進するため、毎週一回授業者を決めて授業研究をし、それを全職員が見て研究協議をし、問題点の解明につとめてきた。

子どもに対して、学習のきまりの徹底と定着化をめざしながら、きびしさある授業で学ぶことの本当の喜びを味わわせ、同時に学習の効率化をすすめてきた。

2. 研究内容

研究をすすめるについて 毎年年度始めには、次のことをお互いに確認し、各学級とも共通

の学習基盤づくりをして全校児童への徹底を期してきた。

- ①生活指導と教科指導の統合化をめざす指導
- ②班の編成について（意義、人数、編成方法、編成がえ、班長の役目）
- ③バズ学習の進め方（授業の流れ、発言型式、ハンドサイン、学習のしつけ、話し合いの型）

(1) 課題と評価

課題とは、その教材の指導目標と、子どもの学習活動の間であって、子どもの思考、問題解決のはたらきや、知識、技能の定着をうながすもの、つまり、仕事の内容を指示するものである。まず、授業においては目標の具体化のために適切な課題を構成し提示しなければならない。課題が提示されたら子どもたちは、目標を定めて課題解決に積極的にとりくむ。「まず自分で考える」→「バズ」↔「全体討議」をする中で課題を解決していく。その過程で、目標がどの程度達成されたかを子ども同志の話し合い、教師の指導助言等で即時的に明確に評価していくことが形成評価であり指導過程における評価方法の一つである。このように学習効果の評価は、次の学習の子どもの意識づけにもなり、教師の指導反省と次の授業の改善に資するため重要である。以上のことから課題と評価は授業においては重要な関係をもって相互に関連しあっている。

(2) 評価に対する基本的な考え

ア、即時評価のねらい

即時評価については、即時評価の方法・場所・適否・とりあげ方・教師の助言等などについて研究してくるなかで次のような仮説をたてた。

- ・子どもたちの理解度を的確にとらえることができる。
- ・努力成果をみることができる。
- ・到達度をはかることができる。
- ・相互活動によって自己調整ができ人間関係を高めることができる。
- ・子どもたちの変容をとらえることができる。
- ・子どもたちが学習のねらいや内容をは握して学習意欲を高めることができる。
- ・確かめができる。
- ・学習のまとめができる。
- ・指導の反省ができる。

イ、評価として考えること

学習活動が存在する以上、評価はどこでも存在する。いささか拡大して考えれば、次のよ

うなものも評価として考えられるだろう。

確かめ(是認)。 まとめ。 反省。 はげまし。

ウ、おもな評価方法

学習過程における評価のしかたとしては、いろいろな方法が考えられるが、普通、次のような方法を単独、または、組み合わせて用いている。

- ・挙手をさせる(ハンドサイン)。
- ・ノートさせる。
- ◎相互活動(バズ)をさせる。
- ◎評価テストを行う(プリテスト・ポストテスト)
- (隣接法、対人法、輪番法、自由会話法)。
- ・読ませる。
- ・指名し発表させる。
- ・動作させる。
- ・机間巡視をして指摘する。
- ・反応器を使わせる。
- ◎自己評価表に記入させる。
- ・是認と否認。
- ・プリントに書かせる。
- ・観察する。

これらは対教師、児童相互、児童自身のいずれかにおいてなされるが、最終的には原則として教師側の対児童評価でしめくられる。

エ、評価する上での留意点

- ・常に評価を目標との関係でとらえていくこと。
- ・認知、態度の両面から評価していくこと。
- ・広義にとらえて、話し合い活動は、すべて評価活動であることを意にとめておくこと。

(3) 授業研究(現職教育)での評価のとりくみ

研究を深めるため「授業研究の観点」を設定して研究協議内容を深めてきた。その観点は次のようである。

- ① 学習課題は適切であったか。(学習過程はよかったか。 目標との関連。 児童の課題へのとり組みと課題の適否。 個人思考と協同思考のけじめ)
- ② 相互活動や即時評価は適切であったか。(話し合いの深まり。 解答と理由。 評価の観点(尺度)。場所・方法・回数。)

そのために、授業研究の参観には、各教師が子どもの動き、発言内容、とりくみ等を確実に観察しメモをとって研究協議会にのぞんで、思ったことをどしどし発言し合った。そして、思ったことを正直に言い合うのが授業者へのエチケットであると考え実践してきた。

(4) 評価の実際

即時評価を教師が意識的に実行することによって子どもたちの学習意欲を高めることをねらってきた。その効果的な方法として相互活動と自己評価表と評価テストをとりあげた。その三つについて具体的に示せば次のようである。

ア、自己評価表による評価

(ア) 方法

- ・本時の学習内容や目標を記入し本時どれだけできたか、児童自身に記入させる。そのとき理解、態度、興味などの観点を設ける。

(イ) 教科

- ・国語、算数、社会、理科、図工、体育、クラブ活動、一日の生活反省

(ウ) 場面

- ・1時間の終わり(まとめ、確認)の段階。
- ・作品製作の途中、体育の実技の反省のとき。

(エ) 処理

- ・机間巡視、挙手により全体傾向を把握する。
- ・評価表の用紙に記入した後、教師が目を通して“朱”を入れる。
- ・自己評価表の自己評価後、班での相互評価をさせて確実性と妥当性を増す。

(オ) 効果

- ・児童は、理解できたこと、わからないこと、疑問であることがはっきりしたり、技能の習得程度、到達目標とのへだたりがはっきりしたりして、次時への学習の意欲化、方向づけ計画化に役立つ。
- ・生活態度の反省により次への意欲化と実践に役立つ。

(カ) 留意点

- ・一般に自己評価は、子どもの評価の観点があいまいであるため信頼性に乏しいが、子どもの意欲化をはかる手だてとしては大切である。あいまいな点の是正のため、教師が評価の基準を示すことが大切である。

イ、相互活動による評価

(ア) 方法

- ・グループ(班)あるいは隣同志の話し合いによって、学習課題の解釈や学習の内容の確認、徹底、学習成果の反省などに相互評価をとりあげた。
 - 自由会話法 班の中で誰からでもよいから自由に話し合う } 新しい考えを出して
 - 輪番法 班の中で順番に意見を出して話し合う } 話し合うときに使う。
 - 隣接法 隣り同志話し合う } 目標や内容の確認、徹底を期すときな
 - 対人法 むかい合った人と話し合う } どによく使う。

(イ) 教 科 全教科

(ウ) 場 面

- ・前時の内容の復習のとき
- ・1日の生活の反省のとき
- ・本時の目標を確認するとき
- ・正答の確認のとき
- ・中心課題にとりくむとき
- ・本時の学習事項の確認をするとき

(エ) 効 果

- ・児童が他人の意見や考えを聞くことにより、いろいろな考え方や見方のあることがわかり、自分の考え方が正しいかがわかる。
- ・話し合いを通して、各自の思考をゆさぶり、葛藤させ、思考を高めていくことができる。

(オ) 留意点

- ・教師が無計画的に相互活動をやりすぎると子どもは混乱し思考する力もなくなり、時間不足によって進度がおくれてくるので、教師は計画的で意図的に相互活動をさせることが大切である。
- ・相互活動の方法、場所、回数は、目標や課題、児童の実態を確実におさえた上で効果的に実施しなければならない。

ウ、ショートテスト(小テスト)による評価

(ア) 方 法

- ・5～10問の簡単な問題を印刷したプリントを用いておこなう。
- ・白紙またはノートに解答を書かせる。

この場合問題の提示法として、①口答でいう ②黒板に書く ③OHP等で示す、などの方法がある。

(イ) 教 科

- ・国語、社会、算数、理科

(ウ) 場 面

- ・前時の学習内容の復習
- ・先行経験の調査、本時の問題把握(プリテスト)
- ・本時の学習内容の把握(ポストテスト)
- ・基本的事項の暗記、反復練習(漢字の書き取り、計算)

(エ) 処 理

- ・解答を示し、その場で直ちに評価する。(自分でつける。隣同志交換してつける。班で確かめ合うなどの方法です)

(オ) 効果

- ・学習目標に対する個々の児童の到達度がわかり、指導法の反省や指導技術の改善に役立つ。
- ・その時間に確実に理解してしまおうという意欲をもたせることができる。

(カ) 問題点

- ・問題の作成のための事前準備や結果の処理が大変である場合もある。

(5) まとめと今後の課題

- ① 即時評価について追求してきた結果、相互活動、自己評価表、ショートテストなどについて積極的にとりくみ定着化してき、子どもたちの学習意欲の向上に役立った。
- ② 子どもたちの学力の向上と家庭学習の定着化の上で成果があり、指導の参加度を高めることができた。
- ③ 教師側においては、授業研究累積の結果、適切な課題の提示や適切な相互活動の指示ができて授業の効率化がはかられた。
- ④ 児童に各種の評価をするための手だてや処理について十分配慮し、適切に実践できるようになってきた。

しかし、人口急増都市のため教師・児童とも転出入が多く研究成果の維持発展が非常に困難であるので、その打開が研究発展のために大きな課題である。

3. 問題提起

- (1) 評価活動の究極的のねらいは個の変容であるが、バズ学習における評価活動で個はどのように変容していくのか。
- (2) バズ学習は、集団を通して学習をすすめるが、集団と個はどのようにして関連し合っ高められていくか。
- (3) 評価活動は、毎時間教師の思いつきではなく、深い教材研究にもとづいたもので計画的意識的に実施しなければならない。そのための研究方法と時間はどうかあるべきか。
- (4) 研究推進には、全校職員の合意と理解と協力で学校教育体制の確立をはかって行うことが大切である。そのための手だてと隘路打開の方法について研究を深める必要がある。

第14回 全国バス学習研究集会

第5分科会 (評価)

研究主題・・・学習と指導の評価

研究内容・・・授業の中で学習と指導に評価を生かす

岐阜 土岐市立泉中学校

小島 幸彦

1. はじめに

「評価」という用語からイメージするものは、おどろくほど多様である。教育の現場ではまず、事前テスト、事後テストから単元別テスト、期末テストなど認知的領域の評価が考えられる。

次に、子どものやる気、興味、関心など態度的領域の評価も考えられる。

さらに、カリキュラムなど教材教具の開発や精選などの評価も考えられる。

一方、評価を複雑にしているものとして、教師のもつ教育観あるいは目標の設定によっても考え方が分かれてくるのである。そこで問題を焦点化するために、分科会の研究内容から、学習と指導にかかわって次の二点に区分したいと思う。

- ・一定の学習と指導が終了した時点で、その時間における成果を把握することを目的とした総括的评价
- ・学習と指導の途上で、活動の方向やペースを調整することを目的とした形成的评价

今回は後者の形成的评价について、指導者である教師の側にメスを入れた実践の一端を呈出し、問題の提案としたいと思う。

2. 本校の研究実践のあゆみから

私の学校ではバス学習を始めて10数年になる。紆余曲折はあったが、ほそ

ほととバズの火をともし続けている。研究発表会も何回か持ったが、ここ数年
来問題になっていることは、子どもは育っているが授業のキメが荒いというこ
とである。換言すれば子どもたちは学習集団として興味度、モラル（志気）
が高いが教師の指導観、指導過程、教材開発、教材精選などに問題があるとい
うことである。

そのため私たちは、昭和55年度より「授業で勝負できる」教師になろうと校
内研究に励んできた。授業とは子どもを容れさせる最も大切な場であり、授業
はその教師の指導力が総合的に表出される場であると考えたのである。

授業とは教材（価値）・子ども・教師の三者が学習集団（学級）の場に出会
うことである。すなわち子どもと教材（価値）とのかかわり合いに教師が介在
していく過程であるともいえる。

こうした考えに立って一時間の授業を評価するとき、次の三つの着目の仕方
が考えられる。

A. 子どもたちの学習参加の仕方

..... 集団過程

B. 子どもたちが教材（価値）を習得していく過程

..... 認識過程

C. 教師の介在の仕方を問題にしていく過程

..... 指導過程

このA～Cの三者は切りはなして考えられるものではない。しかし本校の過
去10数年の研究のあゆみをたどってみると、不十分ではあったが常に集団過
程が研究の主流になっていた。（バズの研究では当然であるが）そこでここ数
年は認識過程、指導過程にも力を入れてゆきたいと考え実践している。

3. 研究のねらいと方法

職員はそれぞれ次の三つの研究グループに所属し、それぞれ研究課題を設定
して研究授業を参観する。

- ・集団過程研究グループ
- ・議論過程研究グループ
- ・指導過程研究グループ

研究の内容や成果については紙数の都合で省略するが、こうした研究は地道で大変な労力を必要とするものである。ひとりひとりの子どもを熟視すれば数多くの都合の悪い状態が見えてくる。こうしたことを見ることは手数がかかっていやだというより、ほんとうはこわいのである。はなはなしい研究の成果を語るよりは、現実を熟視する勇気と目を養いたいと思う。

そのために一時間の授業の記録をできるだけ厳密に取り、じっくり読み返してみることから始めるのである。また全員で授業を観察しなければ授業研究に参加できないというのも前近代的である。授業の記録を読んで、授業研究に参加できるような態勢も作ってきたい。

この授業記録を通して、最終的にねらうことは

自己の授業を改善すべく、自らの「授業をとらえる視点」を豊かにする
手がかりを導きだし、それを組織化、構造化すること

を教師集団の場で実現し、さらに

その根底にある教師の指導観を吟味すること

まで深めていきたいと願っている。

4. おわりに

現場の教師にはたしかな教育理論とたしかな実践がなくてはならない。私たちがここ数年実践してきたことが、この分科会で問題の提案としてふさわしいものであるかどうか疑問である。多分にこじつけの面があることをおゆるし願いたい。しかし、教師集団が自らの授業を厳しく評価する力をつけなければ、子どもは伸びられないと考えるのである。換言すれば、ひとりひとりの教師が

研究を通して授業を見る目を養わなければ、よい授業 わかる授業 を創り出すことはできないと考えるのである。

そうすることが終局的には

- ・ひとりひとりの子どもをとらえること（評価）につながること
- ・柔軟性を持って授業に臨めること
- ・指導観・教材研究の深さにつながること

になると考える。

「授業の中で学習と指導に評価を生かす」にはまず教師の力量を職員集団の中でつけていくことであると提案したいのである。

54. 11. 21

メモ

第14回 全国バス学習研究集会

研究主題

個と個、個と集団の上げ

旭川市立忠和小学校長 庭 瀨 利 男

研究主題とその要旨

- 教育とは
- 生徒指導とは
- 個と集団
 - ・ 個の優位
 - ・ 集団の優位
- 学級集団
 - ・ 個人理解と学級集団理解
 - ・ 自己価値感
- 本校での2・3の実態

研究内容

1 学校経営の方針

- 1 人格の尊重、生命の安全確保を優先的に考える。
- 2 環境は人を作ることを自覚し、学校・学級環境の整備・美化に努める。
- 3 学力・体力（知・徳・体）の向上に全力を尽くす。
- 4 学校教育目標の具現化を図る。
- 5 児童・教師・父母一体となつて望ましい人間関係の確立、学校教育の推進を図る。

2 学校教育目標

◎ 心もからだも健康な子

- 1 よく考えやりぬく子
- 2 心豊かで親切な子
- 3 よく遊び喜んで働く子

3 学校課題

- 1 思いやりと実行の尊重
- 2 評価と表現の重視

4 昭和54年度重点目標

◎ 豊かな表現力を身につける

- 1 意欲的な学習づくりに努める。
- 2 自主活動（児童会活動・学級会活動）を重視し、企画力・実践力を高める。
- 3 集会活動を通して情操豊かな子どもを育てる。

5 学年目標（略）

6 学級目標

◎ 5 A

スクラム学級
「ひとりの喜びがみんなの喜びに、ひとりの悲しみがみんなの悲しみになるようなクラスを作ろう！」

- 1 けじめをつけて確実にすばやく行動できる子。
- 2 何事にも目的意識をもち、意欲的に取り組める子。
- 3 計画を立て完成までねばり強くがんばれる子。
- 4 お互いの個性や長所・短所を認め、助け合い、協力できる子。

↓
○ 互い（の良さ・値打ち）を認め合いながら発表。

○ 発表力向上
発表者・・・赤・白・黒表示

○ 聞く態度向上

◎ 6 A

ぴっかぴかの6年生になろう。

- 1 感じの良い小学生になろう。
- 2 6年生としての力を出そう。
- 3 いつもきれいな教室にしよう。
- 4 ねばり強く考え行動しよう。
- 5 班・学級のまとまりを大事にしよう。

○ 学習指導（略）

○ 生徒指導

・ 1枚文集を通してより良い学級集団作りに努める。

・ 以下略

↓
○ 口頭で発表できないようなことでも発表できるようになる。

○ 教師・他の級友との親密感向上。

○ 他の良さを認め発見する。

◎ 6 B

ありったけの力を出しきろう。

- ・ 自分で自分を伸ばすんだ。
- ・ いつもリーダーの気持で。

○ 学習指導（略）

○ 生徒指導

・ 仲間と共にくらすことに喜びの持てる子どもを育てる。

・ 学級行事の計画・実践を通して集団生活のルールを体得させる。

・ 努力目標をもたせ、個性の伸長を図る。

↓
○ コミュニケーション学習活発。

○ 教師・他の児童の発言に必ず相づちをうつ。

○ 教師なしでも学習できる（ある程度）

↓
共通的に見られるもの

- | | | |
|--------------------------------|--------------------------------------|--|
| <input type="radio"/> 人におもねらない | <input type="radio"/> 人なつこい | <input type="radio"/> 集団行動がよい |
| <input type="radio"/> 人におじけない | <input type="radio"/> 明るいあいさつ
をする | <input type="radio"/> 人の意見によく耳を
傾ける |
| <input type="radio"/> 人をバカにしない | <input type="radio"/> やる意欲に燃え
ている | <input type="radio"/> 発表力がある |

7 配慮している点

◎ 学校全体として

- 集団行動
 - ・ 集会
 - ・ 集団の美
集合・整列の敏速・美しさ
行進・・・目線、手足の先
- 校舎内外の美化
- 自分で危険排除
- 明るいあいさつ等

◎ 学級として

- 1時間1時間を大事に
- ひとりひとりを大事に
- 分る楽しい学習
- きびしさ
- 何でも言える雰囲気
- 人の発言をよく聞く
- 学習環境の整備
- 健康増進等

8 問題提起

- 1 グループ参加・発表参加はかなりするが、なお落ちこぼれている子の場合の指導。
- 2 生徒指導と、学力の向上・定着とのバランスの取り方。
- 3 個の優位と集団の優位の考え方、統合の仕方。
- 4 きびしさと、何でも言える雰囲気のじょう成とのバランスの取り方。
- 5 パズの取り入れ方。

第14回 全国バス学習研究集会

「個と個，個と集団の止揚」

姫路市立 八木川学校

市場 郁 也

＜研究主題とその要旨＞

学級は、教科学習・教科外指導の場である。その学習と指導を通して、自己実現・人間形成をめざす場である。そのためには、学級は「個と個，個と集団の止揚」できる学級集団として指導し、育成されなければならない。

「個と個，個と集団の止揚ある学級集団づくり」の基本は、

- ① 集団の成員ひとりひとりを「個人」として尊重する。
- ② 集団の中で、人間関係を深めるための機能を十分にはたらかせる。

とおさえ、望ましい学級集団の基準を、

- 自由にコミュニケーションできる集団であること。
- 全員が共通の価値体系をもつ集団であること。
- 常に協同活動が見られる集団であること。
- 個人の欲求調整がなされる集団であること。
- メンバー間の役割の分化が見られる集団であること。
- 個々人の生産性が高められやすい集団であること。ととらえている。

児童個々が、自己を理解し、指導し、訓練し、評価できる自主的な人間づくりを基とし、集団の中で個と個，個と集団を相互作用させて、相手を尊敬し、信頼し、協同していく人間関係を深めつつ、学級学習集団・生活集団の質を高めていく。そして、学力と人間関係・個人の成長と集団の成長を統合し、児童ひとり

ひとりの人間形成に帰着させていく。そのための学級集団の育成をめざした。

< 研究内容 >

セブンタイムの充実

本校(姫路市立八木小学校)では、教育課程で定められている、教科・道徳(周知)・特別活動の時間以外の「特設バス」は設けていない。

しかし、「個と個、個と集団の止揚」を求めて、学習集団づくりは、教科学習道徳(周知)学習・特別活動の中で実践する。生活集団づくりは、主として「朝の会」・「終わりの会」・「学級活動」・「業間活動」、それに、移行措置の完全実施によって生まれた「余剰の時間(仮称)」の中で実践している。

教育の基盤は、「他人の立場を認める」人間関係にあり、学級管理は断じて教育ではない。必要以上の管理は児童たちの自己実現を妨げるのであるから、集団づくりの諸活動には、児童たちを主体にし、自主的に運営できるよう配慮している。

自己実現のある学級集団

児童たちは、生存的欲求(食欲・睡眠・休息・排泄など)と精神的欲求(愛情を持ちたい・信頼されたい・集団に所属したいなど)を持っているが、この精神的欲求は、自己に欠乏するものを外部より補うことで満足しようとする「欠乏欲求(求める欲求)」と、自己に満ち足りたエネルギーを様々の活動の中に放出しようとする「成長欲求(与える欲求)」とに分けることができる。「成長欲求」は、「欠乏欲求」が満足せられてこそ成立するものである。

『自己実現のある学級』とは、「欠乏欲求」のみに停滞している学級から、教科学習活動・教科外活動の中で、「成長欲求」が至るところで具現される学級に変容し成長していくことであると受け止めている。

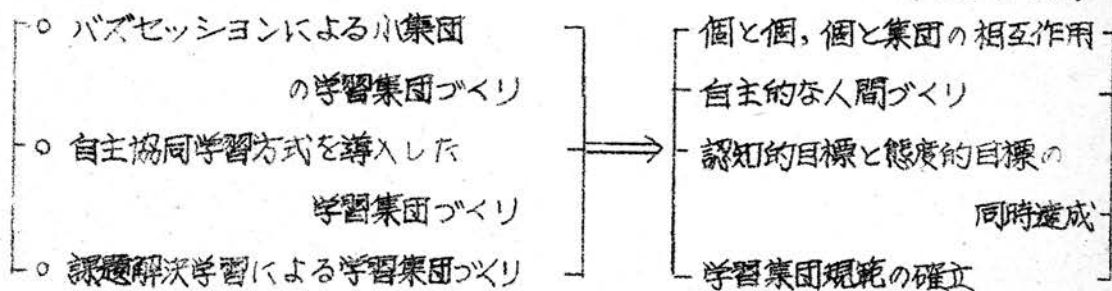
本校では、集団の中で個と個、個と集団の相互作用によって、「成長欲求」の見られる学級集団。すなわち、『自己実現のある学級集団づくり』をめざしている。

< 問題提起 > — 実践報告をもって問題提起に代える —

実践 — “セブンタイムの充実・自己実現のある学級集団”をめざして

1. 教科学習・道徳(同和)学習・学級会を通して学級集団づくりをどうしたか。

— < 全学年共通 > —



2. 「朝の会」を通して学級集団づくりをどうしたか。 — < 4学年の例 > —

(ア) 時間 — 毎朝、5 ~ 10分間をとる。

(イ) 内容

- 児童のグループ内の話し合い
 - 役割分担によって自主運営させる。
 - 昨日の学習集団としてのあり方の反省と
本日の学習集団目標を話し合う。
 - 教師からの伝達事項 — 1日の学習計画・行事予定、簡単な学級指導。
- (註) 保健指導、安全指導、諸行事指導等の時間を要する
学級指導は、15分・30分・45分単位で別に時間をとる。

3. 「終わりの会」を通して学級集団づくりをどうしたか。 — < 4学年の例 > —

(ア) 時間 — 月 ~ 金曜日の授業終了後、15 ~ 30分をとる。

(イ) 内容

- 点検項目を決めて、グループ内で話し合う。
 - 役割分担による自主運営させる。
 - 共通の価値体系(望ましい習慣や
道徳性をもつもの)をもたせる。
- 点検項目 10項目を決め、集団規範(5)、
人権にかかわるもの(5)としている
- 学級集団共通の問題を提起し合い、全体で話し合う。 — 司会は日番が当てる
 - 時間のあるときは、グループ毎に「復習バズ」をする。

4. 「学級活動」を通して学級集団づくりをどうしたか。—〈全学年共通〉—

(ア) 集団の編成 — 学級分担活動(係活動)のグループを編成。(学習小集団とは別)
活動内容によっては、学級を1つの集団にする。

(イ) 活動の内容 — 生産性のある活動をさせる。(自由にコミュニケーション協同活動)に移せる集団をつくる。

5. 「業間活動」を通して学級集団・児童集団(登校班)づくりをどうしたか。

(ア) 時間 — 3校時と4校時の業間時間、15分間。 —〈全学年共通〉—

(イ) 活動の内容

- 火曜日 — 「基礎的体力づくり」と「集団行動」—(学級集団単位で)
- 水曜日 — 「美化活動」—(縦割りによる登校班集団で) [学級を越えて人間関係づくり]
- 木曜日 — 「情操陶冶的活動」—(学級集団単位で)

6. 「余剰の時間(仮称)」を通して学級集団づくりをどうしたか。—〈4学年の例〉—

現行の教育課程の中で移行措置を実施していくのであるから、本年度はまだ、「ゆとりの時間」とは言えない。移行措置によって減少した教材の学習時間分だけ、基礎的基本的事項の充実や学習内容の理解徹底に当てるべきであることは十分承知しているが、4月以降8時間を学級集団づくりに活用した。

(ア) 集団の編成 — 学習小集団そのまま編成する。
活動内容により、同目的の者で編成する。

(イ) 活動の内容(4月以降、4年2組のグループが選択したもの)

- 学級集団が同目的でグループに分かれて活動したもの〈教科学習の延長〉
(・読書発表会 ・リレー大会 ・助け合い勉強会)
- グループ毎に内容を選択して活動したもの 〈創作活動〉
(・秋寛居や人形劇づくり ・文芸や新聞づくり ・創意工夫された工作づくり)
(・遊びや運動づくり)

(ウ) 活動の成果 —
○ 個人の欲求調整がなされた。 ○ 潜在している能力・適性が発揮され、「与える欲求」が満足された → 自己実現。など

第14回 全国バズ学習研究集会

研究主題

個と個，個と集団の止揚

岐阜 土岐市立泉中学校

安藤 寿彦

〈研究主題とその要旨〉

個が前向きに集団に働きかけるとき、集団も向上し、そこに集団としての凝集化がはかられる。また集団が向上し、目的意識をもって行動が始まれば、個も進歩していく。このことは、いろいろな場面で実証され、また理論化されている。

しかし、生身の人間、感情が働き時には対立し、分散する場合のあることも否定できない。

そこで私共は、授業分析を通して「個と集団とのかかわり合いが、どのように作用していたか。」を研究し、指導上の問題点をうきぼりにしようとしたものである。

ここで授業分析にとりあげられた授業のあらましを紹介し、以下の研究の参考としていただきたいと思う。

社会科指導案より抜粋

昭和54年6月6日 2年生A組

◎単元名	古代日本と東アジア	
◎単元の指導計画	Ⅱ・古代の日本と東アジア	計20時間
	1. 日本の原始社会	2時間
	2. 古代日本のなりたち	5時間 本時 ³ / ₅
	3. 律令政治のはじまり	7時間
	4. 律令政治のおとろえ	6時間

◎本時のねらい

有力者にひきいられた集落が小国家となり、それがさらに広い地域を支配する国家となっていく経過を中国の史料から明らかにし、古代国家の形成の要因を見つける。

◎本時の予習的課題

豪族は、次にどんなことをしようと考えたのだろうか。

◎本時の学習展開

- 豪族は次に、どんなことをしようと考えたのだろうか。
- 小国家が、さらに発展してくると次にはどんな国をつくろうとしたか。その国の名は？
- 小国家が発達して邪馬台国ができるまで倭国（日本）はどのように変わっていったか学習する。
- 何か疑問はないだろうか。（ここで教科内バズ）

◎次時の予習的課題

大和朝廷へ学習を進めていくが、大和朝廷はどのように国を統一し、国を治めていくか。今日の学習をもとに考えてみよう。

〈 研究内容 〉

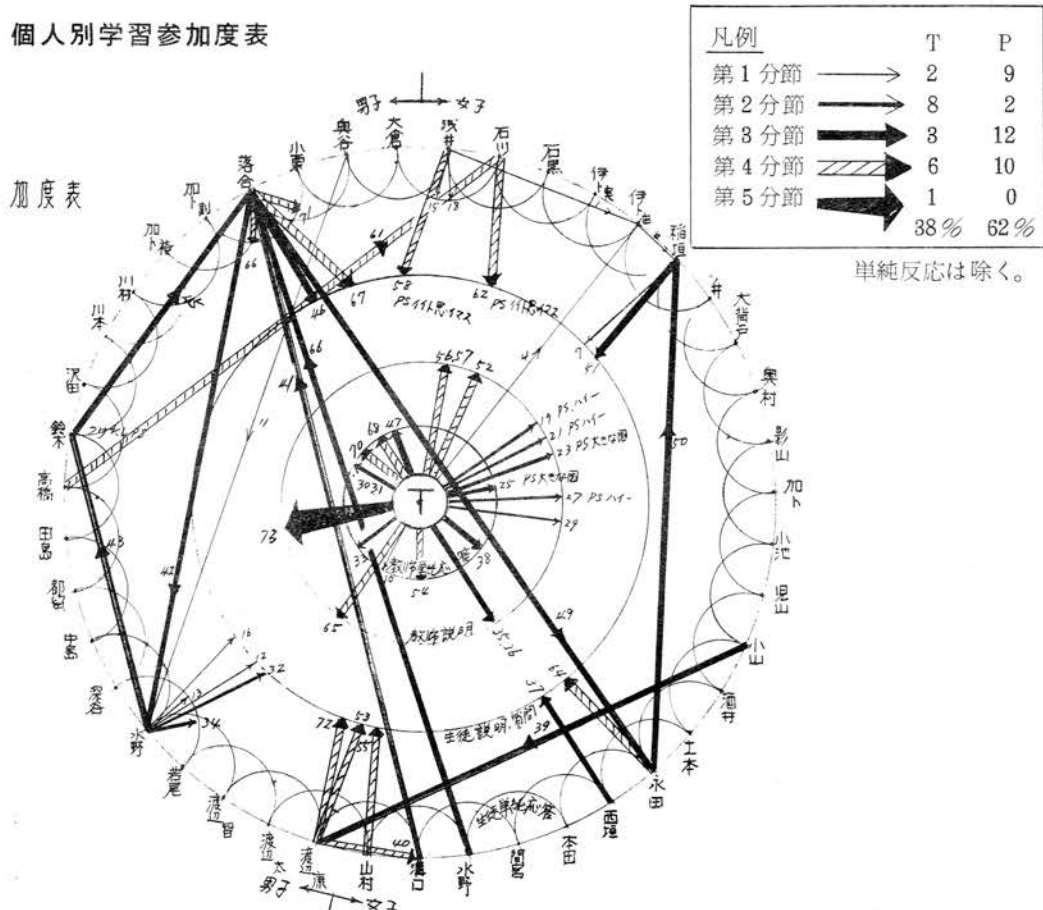
研究にあたって

私どもの研究グループは、研究の目標を「個が集団と、どのようにかかわり合いながら学習に参加しているか」

参加と意志決定を中止として

と設定して、研究を進めてみることにした。特に「信頼感と発言回数及び、発言内容は関係があるのではないか」という仮説をたてて、分析研究をしようと考えた。

個人別学習参加度表



単純反応は除く。

男	6人	37.5%
女	10人	62.5%

男	18回	54.5%
女	15回	45.5%

単純反応	31%
質疑・確認	4%
意見・批判	52%
発議・提案・集約	13%

教師発言	20	28%
生徒発言	33	46%
単純反応	19	26%
(いいと思います。ハイ)		

1. 発言回数にみる学習参加度

個人別学習参加度表を参照していただきたい。発言総数72回のうち、

教師発言	28%
生徒発言	46%
生徒単純反応	26%

教師説明が、他の教科に対して、比較的必要な社会科の授業にあって、生徒の発言活動が約50%を占めていることは、単純反応をも含めて考えれば、かなり高い率を示している。

ただ、発言参加人員からみると、37%の生徒にとどまり、図に見る如く1人で何回も発言している生徒が目立つようである。具体的にいえば落合、水野などの両君は、かなりこの授業で活躍している。また、男女別に発言者の比率を見てみると、男子37.5%、女子62.5%となっていて、女子の方が、発言でみる限り学習参加率の高さをものごといている。いずれにしても、無発言者63%の数字は(発言の多いことだけが、効率の高い授業とはいえないが)大きいように思われる。(比較すべき学級がなくて、断定できないが)

この授業学級が、学習心理学上、何らかの問題を抱えているとすれば、大問題であるが人間的な感情に触れるような課題でもなく、資料で調査したことを発表していくという授業展開の多いものであったので、誰かの発表に「同じです。」と意志表示をしておけばよかった内容もかなりあって、63%という無発言率の数値となっている。が、「同じです。」という発言反応も含めれば、この値は低くなるものである。

2. 社会科の評点別にみる参加度

以上、生徒の学習への参加度を発言数からのみながめてきたわけであるが、少なくとも、この点で考える限り、生徒はよく活動したと思うのである。

しかし、43人中、16人だけの発表者という点からのしぼって考えるとき、今少し、その幅の広がりか欲しいという結論が得られるのではなかろうか。

この16人の発表参加者を、1学期の社会科の評価から調査してみると、下記のような表になる。

評 価	発言者率	平均発言回数
5 (10%)	75%	2.50回
4 (20%)	63%	0.75回
3 (40%)	22%	0.39回
2 (20%)	29%	0.43回
1 (10%)	25%	0.25回

無発言者も意識の上では、学習に熱心にとり組んだ(意識調査)のであろうが結果的に言えば「5」と「4」の評価の生徒たちによって、この授業は支えられていたのである。発言すればおもしろい。おもしろいから勉強する。勉強すれば発言したくなる。発言しようとするればよく聞き、よく考える。……当然といってしまえば、それまでである。

しかし、この数値から私どもは何を考え、何を課題としていったらよいのであろうか。私どもが日々実践している、課題の適度抵抗の問題、生徒の意識の変かく、学級のムード作り等、多くの問題を含んでいるものと思われる。また、この授業における生徒集団の動きを、生徒間の心理・感情を考えに入れまとめてみると、次の様な点が浮きぼりにされた。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① 成績下位者の発言、行動が殆んど見られなかった。② かなり限られた者のみに発言が集中していた。(成績上位者)③ 対立場面が殆んどなかった。 |
|--|

発言内容の分析表（教科バス）

教		師						生						徒			
		F	E	D	C	B	A	a	b	c	d	e	f				
		診断・評価	K R・助言	方向づけ・誘導	思考要求	説明確認まとめ	単純制御	単純反応	質疑確認	意見批判	発議・提案集約	グループ活動相談	個人学習活動				
発言要旨		発言要旨						発言要旨						発言要旨			
〈山村グループ〉		〈山村グループ〉												<ul style="list-style-type: none"> なぜ中国へ輸出？ 貢物をしたかかって！ 前漢時代勢力は朝鮮にも及んだ。 日本も朝鮮に行き来していた、だから関係した。 中国、領土広い、力もあった。その力を借りて国を治めようとした。 領土のうはい合い激しい、力を借りて有利に 中国は倭国と比べて発達していた。貢物をして何かを送ってもらった。 女王になると国が治まるのは？ わからへん どっかに卑弥呼は占いができるとあったやあらあ。 鬼道……まじない術 			
チャーやめて		チャーやめて						<ul style="list-style-type: none"> みこって神になる女の人？ 〈タイマーの音〉 なんていうや 									

		<ul style="list-style-type: none"> ・神に仕えるもんで……古い師？ ・神を信じて……その頭宗教がすごかった。 ・あんまり、わからへん
<p>< 永田グループ ></p> <p>ジャーやめて</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・中国へなぜ貢物を持って行ったやろう。 ・ごほうびがもらえるから ・今でいう貿易 物物交換 ……聞きとれず…… ・もっと大きな声で ・交換みたくないなもんや ・貢物を持って行くことは家来になること。中国は自分の権力を示すために、ちょっと持って行くくとたくさんくれる。貿易とは少し違う。 ・けど……それだけのために……わざわざ…… ・中国には珍しいものがあった。それをもらいに ・女王やとどうして国が治まる？ <p>書いてあったけど 男……争い 女は考えない。だからまとまった</p>
<p>< 落合グループ ></p> <p>ジャーやめて</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・貢物……わかった石黒さん ・漢は強大、攻められぬよう忠誠をちかう <p>中国は日本より権力が強かった。認めてもらうため 光武帝は倭国のえらい人やといって金印をくれた。 漢の国に属する倭の国の王ですよといってくれたと思う。</p>

3. 教科内バズについて

(1) 山村グループ

表1 個人学習参加度表

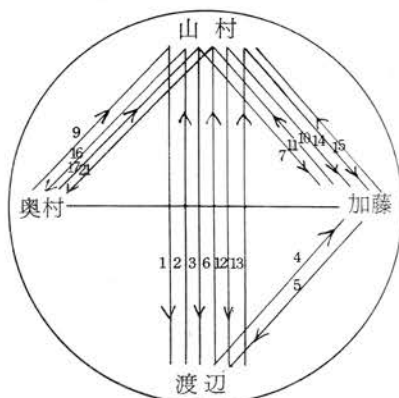


表2 グループの信頼関係

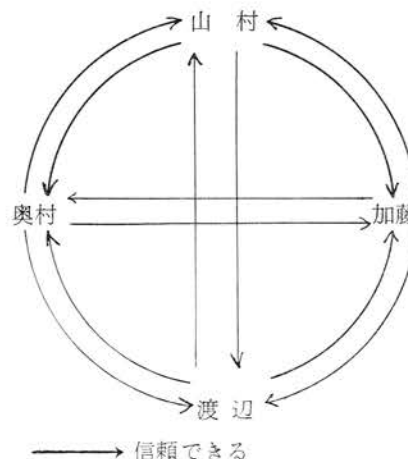


表3 発言の分類

総数	分類	山村	渡辺	加藤	奥村	計
26	発議・提案	4	0	0	0	4
	意見・批判	2	1	1	1	5
	質疑・確認	4	4	3	2	13
	単純反応	1	1	1	0	3
	その他					+1
	計	11	6	5	5	26

数的に見れば、4つの発議に対して「ウンッ」などの単純反応を含め21の反応があった。時間5分という短さから見てかなり活発なバズであったと言える。しかし、その内容を見ると史料の伝達といった要素が強く感じられ、思考の練りあげという点から言うと、もう一つ盛りあがりを欠いたといえる。事後調査における「グループ内の信頼関係(表2)」からもわかる様に、グループ内の信頼関係はよく、それがひいては、バズそのものの活発さにつながっていると思われる。

バズそのものについて言えば「表1、表2」からも、山村が絶えず発言の主導権を握っていることがわかる。名実共にリーダーであると言える。バズの盛りあげに必要と思われる「意見・批判」及び「質疑・確認」の数が全体的に多いという事実からも、また「発議・提案」が山村に偏っているのもその表われであろう。

先に、信頼関係がうまくいっている、と述べたが「学習参加度表(表1)」を見る限り、個々のつながりは弱く、(奥村=渡辺、奥村=加藤、加藤=渡辺)バズの殆んど発言は、山村を仲介して行なわれていたことがわかる。おそらくこれは、山村の持つ雰囲気及び人徳などが影響していると思われる、同程度の学習力を持つ者でも、仮に山村以外の者がリーダーであったとしたら、ここまで活発なバズができたかどうか疑わしい。

それは、バズ以後、このグループからの発言は山村一人しかいなかったということからも言えよう。このバズの活発さが、全体の場へなせ生かされ広がらなかったのか、というあたりに学習時の雰囲気、人間的な関係等が複雑に絡んでいそうな点が考えられる。

人間の感情を柔らげるような、ムードメーカーの存在が集団の動きの中ではいかに大切か、という点を痛感させられた。

(2) 永田グループ

表1 個人別学習参加度

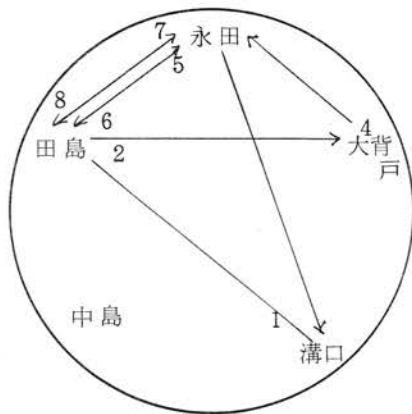
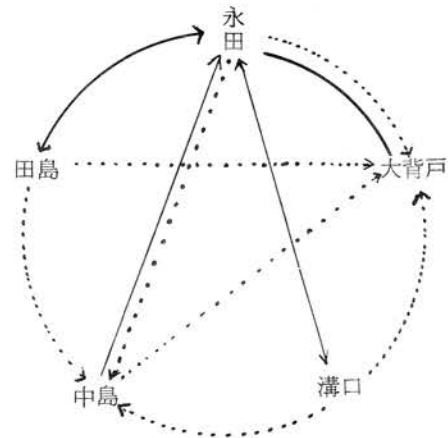


表2 グループの信頼関係



→ 信頼できる ⋯→ 信頼できない

表3 発言の分類

総数	9	分 類	回数	永田	田島	溝口	中島	大背戸
		単 純 反 応	0					
質 疑 確 認	1			1				
意 見 応 応	6		1	2	1		2	
発 議 ・ 提 案 ・ 集 約	2		2					
グ ル ー プ 活 動 相 談	0							
個 人 学 習 活 動	0							
そ の 他	(4)							
合 計	9		3	3	1		2	

全体的にみて、5分という短い時間ではあったが、発言総数の9は、グループの話し合いとしては活発であるとはいえない(表3)。特に中島に発言が一回もみられなく、聞き手にまわってしまい、だれも中島に話しかけていこうという気持ちが見られない(表1)。それは、中島自身が信頼されていない(表2)ことにも原因はあるが、まだグループバズの意義がお互いに定着していないということもいえる。例えば、グループバズ記録にみられる(永田7~田島8にかけての発言のようすから)ように、少し難しいことになると、「まあちょっと。」とか、「わからん。」という気持ちを持たせるのでなく、そのわからないところや疑問に思っていることを出し合って、お互いに高まっていこうという姿勢が欲しい。

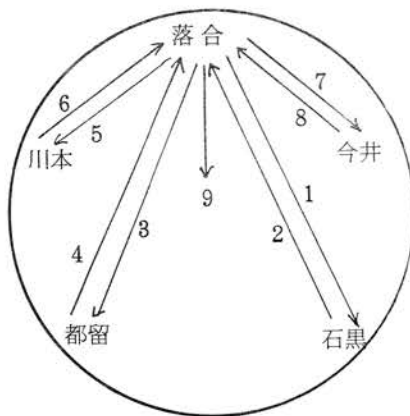
このグループは、班長としての信頼度が高い永田を中心に話し合いが進んでいる(表1・2)が、もう少し溝口の活動がみられると、もっとグループ全体が盛り上がったと思われる。ふだんの生活活

動からみれば、もっと活動できてよい生徒である。溝口をこの学級の中程度の抽出生徒としてみるならば、もう少し時間をかけて話し合いをさせれば、もっと内容を深めることもできたし、また、後半の課題まで追求ができていない(グループバズ記録)ままにグループバズが終わってしまうこともなかったであろう。

もう一つグループの話し合いが進まなかった理由として考えられることは、各個人に提起された課題に対して追求していかうという気迫がやや足りなかったように思われる。もう少し資料をいねいに読み取る力がついていたら、もっと活発な意見が出されたであろう。発言内容をみても参考書などに書いてあったこと、つまり、調べ学習の範囲にとどまっていることなどからいえる。発言された内容が参考書そのものズバリであったならば、反論する予地がなくなってしまい、それに対して「どう思いますか。」といわれても返答できないし、当然のことに、発言回数も少なくなってくる。もう少し教科書や参考書にたよらないで、もっと気軽に自分の思っていることが出せるとよい。そうすれば、内容に深まりのある話し合いができたと思われる。

(3) 落合グループ

表1 個人学習参加度表



3~7 単純な活動

表2 グループの信頼関係



----- 信頼できない
——— どちらでもない

表3 発言の分類

分類	氏名		落合	川本	都留	今井	石黒
	回数	個人計					
総数	5	5					
単純反応	0	0					
質疑応答	0	0					
意見批判	3	3	1			1	1
発議・提案・集約	1	1	1				
グループ活動・相談	5	5	3	1	1		
個人学習活動	0	0					
その他	0	0					

〈個人について〉

- 落合はグループの班長であるが、班員に対して信頼感を持たず、また班員からの信頼感も得ていない。このことは、落合が班長としての自覚に欠けていて、グループに、いろいろ働きかけをしていないことの証明であろう。
- 川本は、特殊学級から編入したばかりであり、班員と十分とけ込んでいない。(表2)
- 都留は学習に対する意欲に欠け、学習中の他事が目立ち、グループバズにおいてもそのことがみられ、バズがうまくいかない原因のひとりである。
- 石黒はグループ編成のとき「都留をなんとかしたい」という願いを持っていたが、その努力に都留が答えなかったようであり、表2のようになっている。
- 今井は川本を除く全員を信頼していない。自分が理想とするグループにならないことに対する怒りの表現とも思われる。

このグループは都留が問題児であるが、石黒や今井の中にグループを良くしようというエネルギーが内在しており、それを班長である落合が引き出したら、グループも高まっていくであろうし、都留自身も変わるのではないか。

〈全体として〉

表1をみる限り、落合を中心にうまく話し合いが進んでいるようであるが、その中の3～7は「わかる?」「まだ」というような単純なやりとりであり、実際は落合、今井、石黒が一度づつ意見をいったにすぎない。その原因として考えられるのは、都留、川本の学習意欲がみられず、グループバズにおいても、彼らのためかなり無駄な時間が消費されている。また、それを許してしまう班員の姿勢も問題である。お互いにきびしきのない姿勢であったため班員相互に信頼感が築けなかったことである。

また、落合、今井、石黒の三名の意見は資料の活用ができているが、自分のものになっていないようである。それは「忠誠を誓う」というようなむづかしいことばにも質問が出ないことが示しており、グループバズに深まりや広がり欠けているといえる。したがって日頃からすべての教科において、自分のことばで発表するという習慣づくりが必要であると考えられる。

4. 授業構成

- (ア) 知識中心で推測で発言できる場面が少ないこと。…………… 自由な立場でものが言え、個々のイメージで歴史を探っていく場面が少ないのは
 - ┌ A, 知識量で勝負(下位者は参加できない)
 - └ B, 記憶中心(参加意欲との絡み)
 - └ C, 史実は一つであり、正誤がはっきりしすぎる)といった傾向を産み出す原因になるようである。
- (イ) 中心課題の定着が弱くまた難かしかったのでは…………… 課題追求が上位に偏り下位の者は、聞き手にまわってしまった。(バズ中も)そのためか、まとめの教師発言が長くなってしまった。中心課題の質も関係しているが、この学習で「教えよう、つかませよう」とする知識、内容の量に問題が絡んでいるように思われる。

5. 生徒間の信頼関係(バズより)

授業形態との絡みも強いと思われるが、上位、下位の意識に近いものが表われていることを感じた。グループ内の発言の中に「教える側」「教わる側」といったものが存在しているように思われた。それは学習参加度の極度の差(永田、落合グループを参照)からも言えよう。又、「わかった?○○き

ん」といった発言にも表われていよう。これは、単に学習成績のみで表われた現象とは思えない。各グループの信頼図と発言図を比較してわかることであるが「仲間から浮いている者」がいる。

さらに事後調査で「なぜ、信頼がおけないのか」の質問に対し、「生活がダラシない」「真剣味、集中性に欠ける」「無責任」といった答えがこの「仲間はずれの者」に多く見られる。個人の成績は秘のため、互いにどの位の成績なのかを知らないにもかかわらず「学習に入れてやらない」や、「教えてあげる」に近い感情や行動が生まれているのは、単に授業研究をすれば解決されていく問題ではないと言えよう。

以上が考察のまとめであるが、最後に考察の途中に導き出された「課題」を挙げ、今後の研究の参考にしていただきたい。

- A. 上位者中心になりやすい、史実追求型の授業の改善
 - 下位の者にも追求でき、わかる喜びが与えられる授業とは（歴史教育のあり方の追求）
- B. 予習的課題及び授業における史料の生かし方
「写す史料」から「読む史料」にどうかえていくのか。
- C. クラス内の人間感情の中に生まれている、過度な劣等意識、優越意識をどのように授業の中でも緩和していくか。

この学級を歴史の一時間の授業を通して見る限り、上記の三点をまず改めることが自己実現を図るための、学級集団作りの要素といえると思う。

第6分科会(学級集団の育成)

学級集団を高める中で学習と生活の統合をめざす

大阪府寝屋川市立第九中学校
乾 和夫

1.はじめに

教師として新しい担任が決まり、新しく始まるこの一年間をなんとか、自分の理想として描いているすばらしい学級や子どもにしたいものだという期待感とか、意欲といったものがわいてくる。

生徒は学級で一日の生活の大半を営んでいる。学級こそ学級内の生徒相互、教師と生徒間の理解に基づき協同とはげまし合いによる、自主的で民主的な問題解決のための最も重要な場である。

(1) 集団に楽しい雰囲気を作られ、集団の目標が生徒の要求にかかりあいかること。

(2) 生徒各自がそれを理解していること。

(3) 生徒各自が相互に尊敬し、信頼し合い、集団の中で安心感を確保していること。

(4) 生徒と教師との間にも信頼し合う民主的な人間関係が確立していること。

要するに生徒個々の要求や不満が学級全体として扱われる為には、学級における望ましい人間関係がそのように育っているなければならないのである。集団に対する所属感、連帯感を強める為最も基本的な集団が学級であり、その為の望ましい人間関係づくりが学級づくりのねらいであるのではない。

2. 主題にせまるために

(1) 目的を明確に

学級づくりの機能を「学級という場の条件を整えること」と仮設を立てる。ここから「どのように整えるのか」という問題が出てくる。「どのように

整えるのか」という問題が出てくる。「どのように」という問いかけの中には、何をめざして、(目的)と、「どのような方法」で(方法)との二つの問いが含まれている。学級経営はそこで行なわれる授業や特別活動などの指導活動の効果を高めるために、学級の物的、人的条件を整えるのである。指導活動には教える機能(学業指導)と育てる機能(生徒指導)とが含まれている。指導活動の目的は何を教えるのか、何を育てるのかでなければならぬ。短的に言えば特定の知識・技能・技術を教え、と同時に、学習意欲や「やる気」を育てることである。

(2) 生徒理解

学期毎に一週間の教育相談週間を設定して、ひとりひとりの生徒に対して、担任教師を中心に実施している。この他に、班一、調査観察等で、生徒理解につとめている。

(3) 集団の相互作用

「よい個人はよい集団によつてつくり、よい集団はよい個人によつてつくりぬる。」という個人と集団を統一的にとらえ、人間関係を深め、個人の発達と集団の成長をはかる。

3. 問題提起

- (1) 教育目標を生徒ひとりひとりに定着させるには、どんな指導をすればよいか。
- (2) 教師のすべての指導が生きた学力として定着させるには、どうすればよいか。

第14回 全国バズ学習研究集会

研究主題 学級集団の育成をめざして —— 班長指導を通しての学級集団の育成 ——

愛知県春日井市立藤山台中学校
小林 三洋

1. はじめに

本校はニュータウンの中学校として昭和45年に開校した。以来、「よい個人はよい集団によってのみつぐられ、よい集団はよい個人によってのみつぐられる。」という考えを基本として、学級集団の成長と個人の発達を考えてきた。

この学級集団の高まりは、学級集団を構成する一つの班の成長によって達成される。その班の人間関係の中心となって仲間を励まし、班の活動を盛り上げていくのは班長である。この班長の動き方一つで、班が生き、学級が高まっていくものと考えられる。そこで、個を高め、学級を高める班長指導に着目してみた。

2. 班長指導への基本的な考え方

(1) 班長に期待するもの

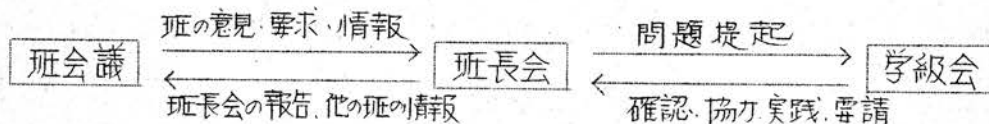
「藤中の学習」(生徒用のテキスト)では、「こんな班長になってほしい」として次の4項を掲げている。

- ・責任感の強い人
- ・おもいやりのある人
- ・指導力のある人
- ・よくめんどうをみる人

—— みんなから信頼される人になりたい。 ——

(2) 班長会の位置づけ

上記の条件にかなう人間として成長しようとする意欲を、班長のひとりひとりが持ってほしいのである。そうした班長育成の一つの場として班長会を生かしている。



このように班長会を位置づけ、班会議や学級会と密接に結びつき、両者のパイプ、また諸活動実践の推進力として班やクラスを高めていく場としている。班長会は班長と級長で構成し、週一回定例会を開いている。また、班長会のぬらいを次のように定めて実践している。

ア. 班、クラスのリーダーとしてどう考え、行動すべきかを指導する場
——> 班長としての自覚をもたせる。

- イ. お互いの班のよいところ、改めなくてはならないところを意見交換する場
⇒ 各班がよい班にしていこうという意欲をもち、高まりをみせる。
⇒ 班長相互の連携を強める。
- ウ. クラスの現状をみつめながら、問題解決の方向を考える場
⇒ クラスの問題点に対する意識をクラス全体に広げる。
⇒ 班を基盤とした活動をすすめ、クラスを高める。

3. 実践の結果

(1) 班長会でのとりくみ

4月以来、班長会を中心とした活動によって学級では多くの成果をあげることができた。ここでその一部を紹介する。

- ・班の活動へ積極的に参加しようとする生徒を班日記や仲間の熱心な呼びかけによって、班の中へ飛びこませることができた。そして、「自分がしっかりした生活を心がけ、班、クラスを高めていくのだ。」という声まで引き出すことができた。
- ・生徒会の「学習態度を充実させよう。」という運動に対して、学級でのとりくみを問題点とてらしあわせながら、「活発に発言をしよう。」を目標として行ない、クラス全体に生徒会の運動への成功感をもたらしした。
- ・給食の準備やあとかたづけにクラスの問題点を見い出し、「早くとりかかろう」「協力して準備しよう」「食事のマナーを守ろう」等、具体的に話し合い、その習慣を定着させることができた。

その他、生活に密着した事柄から問題点を見つけ、解決する手だてを検討し、実践してきた。そうした身近なところに目をつけ、班を基盤として学級を高めていけるところに班長会の大きな意義がある。

(2) 短学活でのとりくみ

本校では、生徒達の手で計画し、運営・活用していく場所として朝10分、帰120分の時間が設けられている。そのプログラムは学級によって特色があり、学級を高める場としてそれぞれよく工夫されている。

私の学級でも現在、生徒達の手で運営され、毎日の学校生活の中でなくてはならないものとなっている。4～5月は、一年生という状況のもとに「一日の反省」「家庭学習の計画」という生活面中心のとりくみであった。とくに、その日の反省をする場面では反省カードを作成し、班長が話し合いを具体的にすすめられるように配慮した。また、班長会では、「どうしたらみんなから意見を引き出せるか」「今週はどんな反省が多いか」等が毎週話し合われてきた。5月下旬からは、その日の学習ポイントを班内で確認することによって復習の足がかりにしたいという意見から、「ポイント整理」も開始した。また、班長会で、先輩や他のクラスの短学活も見学してみたいという要望があり、実施を

した。「他のクラスの良い点を我クラスにも吸収しよう。」「我々の短学活をもっと充実させよう。」と生徒達が真剣に考えはじめたのがこの頃であった。現在は「我々の短学活を完成させよう」と合い言葉に各班が相互に見学しあい、批評会も行なっている。

(3) 自主の時間でのとりくみ

本校では始業前に20分間、生徒の自主的な活動の場として「自主の時間」が設定されている。

「チャイムが鳴る前に全員席にフこう」「自分達の力だけでしっかりやろう」と班長達が呼びかけを行なったのは、班長会が軌道にのりはじめた5月の下旬であった。班長会で学級をみつめる目、解決する力を身につけたことがこのような好ましい方向へ波及していったのである。また、教師が指図することよりも、自分達で考え、やりとげようとするの方が班長の呼びかけを継続させ、他生徒の素直な反応を引き出すことができることを示すこともできた。

(4) 気分そう快トレーニングでのとりくみ

本校では朝7時30分から7時50分まで、気分そう快トレーニングとして各クラブごとに取りくんでいる。

これは、すべて個人の自主的な参加により行なわれているが、自己の怠惰を戒め、規律ある活動的な生活をさせることをねらいとしている。一学期末テストの終了した日のことである。班長達が気分そう快トレーニングには必ず全員が参加しようと呼びかけたのだった。また、その雰囲気盛り上げるために、トレーニング出席表も作成し、グラフにして掲示をした。期末テストが終了し、「明日からクラブにがんばろう」と張りきっていた時でもあり、本当にタイムリーな呼びかけであった。

(5) 教科でのとりくみ

教科指導の場における班長の役割も大切である。全体での学習ルールを徹底させることと共に、班長の動き方についても課題提示の時や班活動を開始させる時に具体的に指示をするように心がけた。

(例) 学習反応器表示の確認、話し手、聞き手の確認、話し合うポイントの指示、課題の出来てしまった生徒への指示、わからない生徒への指示、その他、学習ルールの徹底など

また、机間巡視の際にも気づいたことはその場で指摘している。

4. 問題提起

(1) 一年時 とくに一学期における小集団の育成とその具体的な方法について

(2) 自らすすんで活動する班や学級を育成するには、どのような手だてを講じたらよいのか。

(3) 短期間でのリーダー指導をどうするか。

第4回 全国バス学習研究集会

すべての子どもが参加し、わかる授業の実践

—— 学習集団づくりと学習課題づくりをとおして ——

愛知県春日井市立東部中学校

石 原 憲

1 はじめに

本校がバス学習にとりくみ始めてから4目になるが、今もそれをフブている理由は、伝統ということもあるが、それ以上にバス学習が人間関係を基盤とする教育であり、生徒の参加度を高め、理解をより確かにするなど、わたしたち教師が求める教育そのものど一致しているからである。

しかし、実際にはあらゆる場面で、いろいろの弊害が目立ち、理論とはかけ離れたものになりがちであり、こうした事実に対して厳しい批判を耳にする。

本校において、バス学習が理論どおりにいかない最大の原因は、伝統に甘んじ「仏造って魂を入れず」のことわざどおり、形式に走り教師の教材研究や具体的な指導のてだてが欠けていたためではなかったかと考えられる。

そこで、本年度は、「すべての子どもが参加し、わかる授業の実践」を研究テーマとし、具体的なとりくみにしても、伝統とか、これまでの研究の成果にとらわれず、授業をすすめるうえで最も大切な、学級集団づくりを再びとりあげることにした。なおここでは、バス学習入門期における1学年の実践に焦点をしほり報告することにした。

2 1学年の研究に対する基本的かまえ

(1) 研究のめやす

- ・バス学習入門期における学級集団づくりをどのようにすすめたらよか。
- ・班活動の指導をとおして「個と集団とのかかわり」をどう育てるか。

(2) 研究の意図

1学年では、全校テーマを踏まえて、ひとりひとりを圧かしていくための学

級集団の育成がその任務であると考えた。そして、学級集団づくりのなか
こそ、個と集団とのかかわり（自己認識と集団認識）を育てる基軸をもち
のと考えた。さらに、学級が「学習集団」として本来的に編成されてい
るのだとしても、生徒の側にたった場合、機械的に学級という共同体にはめこ
まれたという程度の意識しかなく、それ故、学習場面で集団としての特性を十
分に発揮して、それにかかわっていけるかどうかということになると入学当
初の生徒の状況からは困難が予想された。

(3) 研究の具体的なすすめ方

- ・学級集団の発達段階や指導の手立て、さらには、学級集集団と学習集団の
かかわり、実践的・理論的に追求する。
- ・学級集団づくりから、学年集団づくりへの展望を追求する。
- ・学年の教師集団づくりを推進する。

(4) 研究計画

- ・第1期 生活に重点をおく。（班のバス活動を、特に短学活に位置づけ、
誰もかかわりをもち、発言できる生活上の問題をとりあげ、子
どもの自主的な活動をひきたす。）
 - 班のもつ意味・班編成と編成かえ。当選と係の活動
- ・第2期 生活から学習へ。（生活班から学習班への移行期で、授業の中
に意図的にバス活動を位置付けていく。）
 - 生活班から学習班、それにともなう班編成の考え方。学習規律
 - 教師の指導言。短学活ノートの活用
- 第3期 学習に重点をおく。（生活班で培われた人間関係、素直な感情表
現を土台として、授業でのバス活動を一層充実させる。）
 - 授業におけるバスの場面設定（授業の組織化）。話し合いの指導
 - 短学活と家庭学習

3 学級集団づくりの実践と問題点の追求

学年部会で、主題について話しあったとき、一人一人の教師が、自分の学級
集団づくりについての実践の記録を、表明にとり、それを学年全体の前にだし
合い、それぞれがかかえている問題を、みんなの話題として、とりあげていく
約束をした。ここで、学年の研究素材として提供された中から問題点をあげる。

- (1) 班内の人間関係のゆがみや班活動のまずさから生徒の中には、班という集団への失望やそれによる逃避が生れてきた。このように個の存在を否定し個をつぶしてしまうような集団でしかない班で、どうしてバス学習が成りたつのか。個と個、個と集団がたがいにぶつかり合う場で、個が生かされる。そうした班をつくりあげていく必要がある。
- (2) 班活動がうまくいかないとき、教師も生徒(班員)もすぐそれを、班長の責任にしてしまう。「班長として指導力がない」「班長があんなふうではしょうがないさ」「班長に責任をとらせよう」という言葉をよく耳にするが、指導の到達目標としては当然のことでも、班長の指導力をもって班のよしあしを問うのは、今の時点で無理があるのではないが。
- (3) 学級目標や班目標には、かならずといっていいほど「よい仲間づくり」を願って、決意を表明しているが、実際にはまったく逆の行為がでてくる。つまり、「よい仲間づくり」はたてまえであって、本音は「楽をしたい」「楽しみたい」「自分さえよければいい」というところにある。この両者にまたがる矛盾を鋭くえぐりだし、その事実を直視させ、生徒たちにもなならない状況に追い込み、そこから班の変革を求めようとした実践があった。
- (4) 問題生徒の勝手気ままなふるまいが、学級集団の秩序を乱しているという事実に対して、その問題生徒や心情的同調者に対抗しうる本来学級の主流となるべき正しい批判層や無関心層をどのように組織していったらよいのか。教師の指導と生徒集団の力の統合の大事さ。さらには、ある目的を達した時点での教師の適切なすきを与えぬ指導のあり方が強調された。
- (5) 問題のおきない学級がよい学級ではない。むしろ問題がないということの問題にしなければならぬ。人間どうしのぶつかりあひがあれば必ず問題が生じる。それを事実として真正面からとら

え、どのような形でのりこえるのか。問題を教師自身のこととして背負いこむ勇氣から成長が約束される。今こそ教師の指導性が厳しく要求されている。その力を付けるためにどうしたらよいのか。

4 | 学期のまとめ

- (1) 時間的にも日程的にも十分な余裕はなかったが、実践記録を媒介にして教師間で自分のかがえている問題をありのまま話し合えたのは、教師集団の高まりとして評価できる。
- (2) しかし、ひとりひとりの実践記録を検討する時間が、やはり不足し、自分の実践研究が十分に批判の対象となりえないできたものたりなさが残る。
- (3) 学級の日常生活や班づくりも大切であるが、学級集団のもっとも具体的な活動の場である授業場面でのとりくみに一貫性がなかった。
- (4) したがって、現場の教育研究のあり方すすめ方が確立していない。
- (5) 学年現職教育のスタートがおくれ、バズ学習導入のもっとも大切な4月5月の時期を無駄にしてしまった。
- (6) 学年の学級数11、担任もベテランからはじめの者まで千差万別。当然のことながら、同一の歩調でとりくんできたつもりでも、結果的には、学級間の成長にギャップができる。こうした点に対する学年全体の強かな援助、理解が足なかった。

5 おわりに

以上が、我々16名の学年教師集団が1学期間とりくんできた実践の一部である。紙数の制限で十分意をつくせなかったが、教師ひとりひとりの教育実践への認識と姿勢を変え、成長を保障していく場になりつつあることは、1学期の成果としてとりあげたい。しかし、今現在も毎日の授業のなかで、バズ学習がバズ遊びにおわっている事実もめずらしくない。また、バズ学習に対する根本的なところでの考え方の相異から、かみあわなっている事実もある。しかし、前にも述べたように、形式や伝統にとらわれることなく、これからいろいろな角度からの実践をとおして研究をすすめていきたい。

第/4回 全国バズ学習研究集会

「より充実した学校生活を送るためのバズ学習」

姫路市立林田中学校

高橋雅人

研究主題とその要旨

- 過去における学習態度は、受動的で主体性があまりなく意欲も欠けていた。又望ましい学習態度も確立していなくて、ちょう笑や攻撃が平然と行なわれていた。厳しさに欠けたノンビリ型の生徒が多く漫然と一日を過している状態であり家庭学習の習慣もあまり定着していなく教科学習面においても効率的でなかった。
一斉授業ではこの弊害は改善されないことに気づいた教師集団が学習の効率をあげるための授業形態や指導法について協議した結果「バズ学習」を取り入れることにした。
- 短学活も自主的に運用されるようになり、日目標の徹底や生活態度の反省も真剣にできてきた、又学習態度も良く授業のとりくみも真剣になってきた。しかし家庭での学習が定着していないのは林田の地域性だときめつけないうで教科学習への「つなぎ」にするために「七校時バズ」を特設した。

研究内容

1) バズ学習を生かした授業の研究

- ア. 班の構成人数は4名を原則とし、各班が等質になるよう配慮した。
- イ. 学習班と生活班は一致させ、学期に2～3回の編成替えをすることにした。
- ウ. 各班には班長をおき、核の指導にあたる。
- エ. 班討議させる場面と時間配分はあらかじめ教師が研究し、各クラスにはベルタイマーを設置した。

さらに以下のことを目標に初年度から基本的な体制づくりをした

- オ. 生徒に活動の場を与える。
- カ. 積極的に授業に参加させる。
- キ. 学ぶ意欲を持たせ生きいきしたふん囲気をつくり出す。
- ク. 学習態度を身につけさせる。

A) 生徒が自主的に創造する授業

与えられた学習でなく生徒自らが創りあげていく授業を目指して
授業の一部(導入部)を各教科委員に担当させ、活動の場を設定した。

- ア. 教科委員が教科担任より活動についての具体的説明を受け計画を練る
- イ. 学年毎の教科委員が討議をし更に綿密な計画をたて強化を図る
- ウ. 学年毎に教科委員が他のクラスに入り、活動を中心にした相互参観を行なう
- エ. 相互参観のあとで教科毎の反省会を持ち、より一層の強化を図る

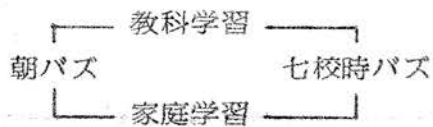
B) 教科委員の活動

- ア. 次時の準備物、課題、活動内容の確認。
- イ. 次時活動内容のろち合わせ。(教科委員カードに記入)
- ウ. 活動内容

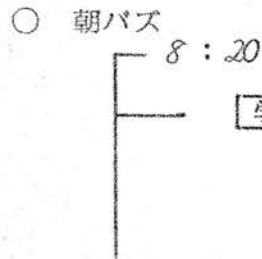
- 1. 前時の復習
- 2. 本時学習の「ネライ」の確認
- 3. ネライに対しての問題点や疑問点を班内で討議させる
- 4. 各班毎に発表させる
- 5. まとめて板書する
- 6. 解決する

- エ. 授業のポイントを小黒板に書く
- オ. 教科委員カードに記入し反省資料とする

2) 第七校時バスの特設



- ア. 左図のように一日の生活時間帯を一連のサイクルとして流れの確立を図る
- イ. 次年度は朝バスと七校時バスの具体的内容、時間配分を明確にした



班単位で課題や約束事項の点検
(点検カードに記入)

- ・問題解決
- ・学習内容の確認

- 生活面
 - ・日目標の決定
 - ・連絡事項 (教科委員や各部執行委員)
- 8:40 教師の指導と伝達

○ 第七校時バス

- 2:50 黙想 清掃後広放部員の指示によりレコードを聞きながら心を静めて一日の生活を反省する
 - 51 黙書 あらかじめ小黒板に板書してある連絡事項等を個人黙書ノートに記入する
 - 53 教科決定
 - 54 個人追求 学習内容の要点や確認等を整理し、理解のあいまいな事項を抽出する
 - 3:00 相互追求 班長の司会で班毎に質疑応答をする
 - 10 家庭学習の計画
 - 3つの約束
 - ア. 覚えること
 - イ. 練習すること
 - ウ. 予習すること
 - 等の確認と学習計画
 - 15 全体討議 班内での未解決問題を学級全体で検討する
 - 20 生活反省 一日の生活面の反省をする
- 3:30

◎第七校時バスの相互参観

他クラスの運営状態を参観することにより、長所を参考にして能率をあげるため以下の要領で実施した

- ア. 参観者 正副委員長、各班長 (去年は全員)
- イ. ミーティング 班単位で感想や意見交換 (参観後10分間)
- ウ. 拡大班長会議 後日放課後に実施

3) 校内研修

○計画

	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
教科	A		相互研修	相互研修	A		A	相互研修	反省と	まとめ
	B				B		B			
同和		A	研修	研修		B		研修	反省と	まとめ
濃密		B				A				

: 職員を A B の2班に分けて研究授業を公開

: 相互参観 (空き時間を利用して)

研究授業は各分科会毎に事前研究 (指導案を中心に) と参観後の反省会を行なう。

相互研修は指導案なしで自由に参観し、毎週水曜日に反省会を持つ。参観の計画は係教師が作成する。

○授業参観の視点を

- ア. 一人ひとりを生かしているか
- イ. 学力不振生の集団内における活動の場は保障されているかの2点にしほり、併せて
- ウ. 生徒の実態に即した指導展開であるか
- エ. 予習課題が生かされているか
- オ. 教師の指導技術面

等の研修を続けている。

問題提起

1) バス学習を生かした授業の研究において

- ア. 生徒だけでは事前、事後の話し合いはスムーズに進行しない
 - イ. 班討議させる場合、当を得た質問ができにくい
 - ウ. 意見をまとめたり処理することが不十分
 - エ. 導入だけでなく授業の展開へと発展させる必要がある
- 以上のことより教科委員、班長を含めた核の指導をどうするか

2) 第七校時バスの特設により

たしかに生徒たちは自主的に行動できるようにはいるがまだまだ「ほんもの」ではない。

即ち依頼心も残っており、個々の発言が集団の中に広がりをもたらす要素になっていない。

集団に埋没しない個をいかに育てていくか

3) 授業——第七校時バス——家庭学習——朝バス——授業

がノツの円運動として行なわれるよう総合的な学習体制の確立をはかっているが円滑に進められているとは言えない。

思考的な問題や内容のは握面で表面的に流れる傾向がある。

又家庭学習が主体的にとりくめていない現状をふまえ、これを確立させるために授業との「つなぎ」として設定した第七校時バスはどうかあるべきか

第14回 全国バス学習研究集会

非行生徒をつくりだす教育

広島県豊田郡豊浜町立豊浜中学校
望月民雄

- 非行生徒をつくりだす教育（基本的生活習慣を身につける活動）
地域の実態、生徒の実態から生じる学習上の問題、校外生活の問題、そこから生じる非行の問題。これらの諸問題に対して
 - 基礎学力をしっかりと身につけさせる
 - 基本的生活習慣を身につけさせる
 - 地域にゆきふりをかけること を指導の重点とし全教師が意識統一し、教育の全領域で指導の徹底をはかってきた。

1 基本的生活習慣をつける活動（取り組み）

具体的な取り組みとして今年度は（1）気持ちのいい挨拶と返事ができる
（2）1日じめる生活ができる

という2点を重点として指導することを確認した。

- 1 生活の手引（モデル）をつくり 4月に時間をかけて指導した
- 2 へして良かったという経験をさせるため、その場の設定と評価（ほめる）に努めた。
- 3 生活の記録をとらせることにより自己評価の資料とさせるとともに相談活動に努めた。
- 4 地域バスはもうろんのこと、地域懇談会や家庭訪問を具体的に生徒の日常生活について話し合い、地域、家庭との協力を依頼した。

- 5 学級指導に位置つけて指導した
- 6 巡回指導の充実をはかった。
- 7 即時指導の徹底に努めた。

2 事 例 (夏休みの生活指導)

毎年9月の始業式には、何人もの生徒がバタバタと倒れる。両親不在で生徒だけの生活。そこには何の制約もない。グループをつくり夜間外出、外泊する。食生活、生活態度の乱れをきたす。当然のごとく2学期の前半は、また1かり生活改善にとりくまねばならない。こうして反省から次のことを実践した。

- 1 しつこいまでの事前指導
- 2 ラジオ体操とクラブ活動の充実
- 3 毎日の巡回指導と地威の協力
- 4 電話と手紙による指導
- 5 教師と生徒の共同生活
- 6 生活記録の活用

3 成 果

ラジオ体操の充実と巡回指導の徹底などのとりくみによって生徒が生活を乱すこともなく2学期をむかえられたこと、何より地威、父母が中学校教育に關心をもち協力されたことが成果であった。

4 問題提起

不在家庭の生活指導をどうされているか。

番組製作をとおしての生徒指導について

愛知県立旭丘高等学校(教諭) 三宅正夫

1. はじめに

わが校の放送部が初めて手がけたテレビ番組「赤い糸」が、全国高校放送コンテストで文部大臣賞を獲得した。全国一に選ばれた喜びは勿論大きいですが、今年の課題「放送と心のふれ合い」を求めている部活動それ自体の過程に大きな意義を見出したように思えるのである。そこで、その製作過程をふりかえりながら、高校生が作る番組への指導について少しく考察してみたい。

2 製作過程について

(1) テレビ番組の台本というもの

ラジオ番組の製作には慣れている部員たちもテレビ番組の製作については全く無知であった。それ故、まずテレビ番組の台本というものを見せることから始めなければならなかった。

(2) 題材探し

テレビ番組の題材はどこにでもあるように思う。たとえば、郷土文化を取り上げたり、社会的な問題にメスを入れたり、高校生活を追いかけてみたりすることなどが考えられる。今回は、番組台本を初めて作る生徒たちのために、種々雑多の話題を提供してくれる新聞記事からの題材探しを求めた。そして、「放送と心のふれ合いにふさわしい話題を探すように」という指導をしたのだった。

(3) 老夫婦と雨ガエル、心の対話 4年間

この中日新聞(4月19日付)の記事がテレビ番組「赤い糸」の出発点となった。1年生の部員Y君が持ち込んだのを、番組企画会議で検討したのであった。そして、老夫婦(木全秋男さんご夫婦)と雨ガエル君との心のふれ合いをぜひ番組にしたいということに決定した。この決定をした時の生徒たちの意気込みはすさまじいものであると私には思えた。

(4) 木全秋男さん宅へ

初対面のあいさつのために部員7名とともに木全さん宅へ。庭先には雨ガエル君の姿は見え、木全さんのお話を聞くこと3時間余、多芸多才の木全さんの生きざまに生徒たちは関心を示すばかり。いつのまにか、テレビ番組のための取材を通して新しいふれ合いが始まっている、ということに3年生のN君が気づいたのであった。

(5) 別のふれ合いが生まれた。

木全さん宅への数回に及ぶ取材活動は、生徒相互間の対話を多くさせ、木全さんご夫妻との語り合いは、生徒たちの楽しみの一つになっていった。また、顧問教師と生徒の間にも共通体験にもとづいた何か暖かいものが感じられるようになった。それこそまさに、「放送と心のふれ合い」であると思った。

(6) 台本どおりに作れない。

N君の発想は、当初、全く見知らぬ人々の雑踏シーンの上に、赤い糸をからませながらタイトルを流していきこうというものであった。しかし、残念ながら、わが校放送部には、ミキシング装置もそれを補う技術もなかったため、彼が言うような場面を作るのは不可能であった。そこで、彼の発想を大切にしながら、別の方法で表現できないか、といろいろ話し合ったのである。そして苦肉の策をN君が考え出した。それは、黒画用紙にあらかじめ白の絵の具で「赤い糸」と書いておいた上に赤い毛糸をからませておいて、テーマ音楽にしたがって徐々にその毛糸を引っ張ることによって少しずつテーマ「赤い糸」を出していきこうというものであった。ミキシング装置がなく初の台本どおりに出来なかったことは非常に残念であったが、生徒がそれに代わりうる画面をいろいろ工夫して考え出そうとしたことに意義を見出す。

3 テレビ番組「赤い糸」から学んだこと

「赤い糸」製作実践を通じて学んだことの中で、一般的に番組をつくるために有効だと思うことをまとめるならば、次のようになるのではないか。

- (1) 部活動全般にいえることで、放送部だけに限ったことではないが、番組づくりにはチームワークが最も重要なことだと思う。わが校には、放送技術に強い山田克美先生も顧問としておられるので、私は生徒といっしょになって番組の企画などについてワイワイガヤガヤと、生徒とのきずなをつよめるよう努めること、生徒間のチームワークを考えればよいのは幸いである。

- (2) プレーンストーミング的な番組企画会議を十分すぎるほど行なう必要があると思う。そこには、建設的な意見にもとづく教師の正しい方向づけが大切であるが、それをあまりに強調しすぎると高校生らしさを失ってしまった番組に陥る。編集、音楽、企画において教師も生徒も言いたいだけ言い合って、両方の意見をミックスさせる努力をすることだと思う。

- (3) 課題探しの方法はいろいろありすぎるほどあると思われるが、まず実際のテレビ番組（たとえば、「明るい農村」「北陸東海」など）を出来るだけ見るように指導するとともに、身近な新聞、雑誌、ミニコミ誌、民俗誌などを番組製作の視点で見させるようにすることも有効であろう。

- (4) 番組製作をより容易にかつ効果的にする設備及び機器（たとえば、スタジオ、コントロール室、ミキシング装置など）があればあるほど良いにはちがいないが、現実的な問題としては、最少限、テレビカメラ、編集装置付VTR、ふつうのVTR、オートサーチコントロール、モニターテレビなどがそろえば番組製作は可能といえる。高校生が作る番組なのだから、プロにはまねのできない内容、発想を育てることがテクニックを駆使することよりも大切ではないか。

- (5) 学校を離れての取材活動は、生徒、教師ともに未知の人に出会う、という魅力がある。そんな雰囲気の中でこそ生徒心理の本音が聞かれることもある。

〈注〉この資料は、三宅が
第11回愛知県公立高等学校
視聴覚教育研究大会(11月14日)に
提案したものを、改題・編集したものです。

第 14 回 全国 バズ 学習 研究 集会

「個を生かす集団づくりをどのように進めるか」

姫 路 市 立 東 中 学 校

森 清 剛

1. 研究主題とその要旨

一人ひとりの生徒の疎外感をときほぐして行くことによって未然に非行防止を進めてゆく手だてと工夫

2. 研究内容

(1) 本校の概要

・ 学年別生徒数 (各学年 4 学級)

学 年		1 年	2 年	3 年	合 計
生徒数	男	69	77	86	232
	女	64	82	83	229
合 計		133	159	169	461

・ 職員数 男子 15名 女子 7名 計 22名

・ 学校の位置

本校は国鉄姫路駅より約 5 Km 東にあり、新幹線・山陽本線・国道 2 号線という交通の大動脈が横断しており、近年の都市への人口流入、近郊都市部への工場の移転により、住宅街・木工団地・鉄工団地・印刷団地等が形成され、世帯数は 3000 戸余となってきました。ここ 10 年余の中で 1 / 3 の増を示し都市化傾向の様相を呈しております。

(2) 基礎学力の徹底

・ 早期漢字書取り自主学习

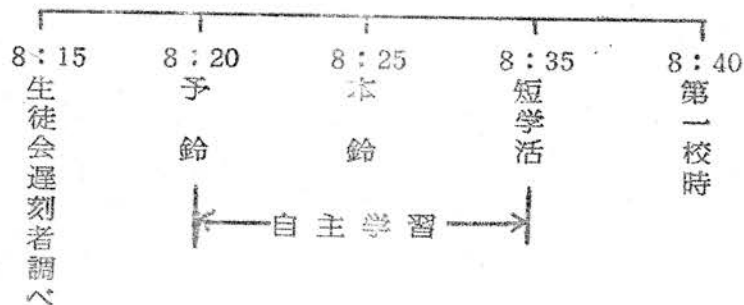
生徒たちが現在どのような悩みをもっているか、その悩み解消をどのように行ってきたか、真の生徒理解とはどうあるべきかを考える中で、

1. 個人の特性に応じた豊かな個性の養成

2. 基礎的な学力・基礎的な体力・基本的な生活習慣の徹底。
 これらを図るために、無気力な生徒をつくらないようにすべての生徒に学ぶよろこび達成体験を会得させ、やればできるんだと自分自身の可能性を信じこませ、自分の明日への目標をもたせるため朝の自主学習を実施してきました。毎日の生活の中で文字が言葉がいかに大切であるかという自覚とやる気をもたせることの大切さから本校の毎朝の漢字書取りの自主学習は放送部の朝のあいさつより始まり自主学習準備にかかります。当初は一部の生徒が不熱心であったりして国語委員を困らせたりしておりましたが全教師の意欲づけとクラス討議の努力によって班活動の定着による練習の深化により、自分が伸びるという実証から軌道にのってきました。

毎週木曜日書取り10題、読み5題の小テストをし採点記録集計し、その結果つまずいている生徒は学年毎に担任による個人指導をし、再三にわたる面接を行い学年毎に昼食時や放課後利用で班員による手助けを行い覚えて、再テストをします。

この自主学習の徹底によって、朝の遅刻者は皆無となりました。



(3) つまずき生徒の発見と事後指導

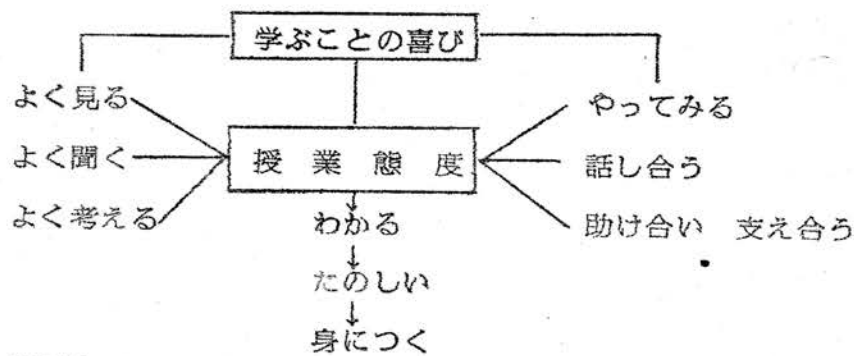
どこの学校にも見られる学業不振という現象は本校においても同じく見られます。四則計算(自然数)が両指を使ってもできにくい生徒がいる実態からだれがどこでつまずいているかの発見と事後指導について学年始めの職員協議会で全職員の共通理解から5月中には前学年の内容までの「つまずき発見テスト」を全校一斉7校時に実施(1年・19回、2年・12回、3年・7回、9月に4回)各テスト70点を合格ラインとし、結果処理については個人カードをもたせ、自分がどこでつまずいているかを発見させ事後指導に入ります。毎週水曜日一斉7校時学年担当6名がかかります。

各クラスでは班員の中からリーダーを選び、マンツーマン方式で指導してゆきます。この結果、生徒は生徒なりにうまく時間を利用して班全体でも取り組む姿勢がつけられるようになってきました。

計算練習カード（42項目、172種類のカードが廊下におかれ、生徒は自由に利用）を使用し、自分のつまずきを取りもどすべくガンバッテいます。毎日学校で何もわからないと思い込んでいた生徒が、問題が解け出しクラスの友から、「ガンバッタナア一。」と励まされていく中で行動面にも明るさがでてくるようになった。今までのあきらめから、やれば出来るという少しずつではあるが意欲をもつようになってきました。朝の自主学习、つまずきを取りもどしていこうという毎日のくり返しが生徒指導上大きなプラスになっていると思います。

(4) /時間/時間の授業の大切さ

授業は学力をつける最も大切な場であり、授業に生きる体制づくりこそが不可欠であり、教えるべきことは徹底して指導していく気迫と信念を持ち、生徒に対して何時も積極的に、新しいはたらきかけを試み、何のために学習するかを、しっかりとつかませていきたいものです。自分の学力をつけるという事は、自分の幸せな人生を築きあげて行くことの指導から、その時その時間の授業を大切にしていって生徒を作っていくようになります。



(5) 教師集団の意志統一

生徒理解、生徒指導については、週/回の学年会と、生徒指導部会ををもち、常に同一歩調、共通理解を図りながら、更に問題によっては職員協議会で討議を重ね、各学年から具体的な問題についてその方策を考え、全教師が一丸となって納得づくの指導方法を生み出し、教師相互の厚い信頼感をもって当たっております。どのような事象に対してでも、教師はき然たる態度で臨み、/人の生徒の問題を全教師の問題としてとらえ、問題生徒の早期発見、

早期治療に努めています。

(6) 関係諸機関との連携

最近の青少年非行の低年齢化から関係諸機関と次のような連絡をとっております。

- ・愛護育成会総会常任委員会
- ・市補導委員による巡回補導・特別補導
- ・補導センターとの緊密な連絡
- ・民生委員との話し合い
- ・地区推進協議会

もし、問題が発生すれば、市教委・警察・鉄道公安等の連絡をとってきました。

(7) 問題点

どのようなキメの細かい指導をしても、今日の有害環境・家庭環境からは防ぎきれない突発的的事件が発生することがあります。

3. 問題提起

(1) 突発的問題発生に対する処し方は、いかにあるべきか。(発生以前以後の問題)

(2) 平素の教師の観察指導の効果的なあり方について。

- ① 万引生徒
- ② 禁止区域遊泳
- ③ 家出生徒

4. むすび

学校経営方針の1つとして、「後姿で教育のできる教師」があげられています。その方針に従って指導体制はできつつあり、できてはいると思いますが、上記の問題発生時には、われわれ教師は胸の締つけられる思いが致します。何時もキメ細かい点検・反省をくり返しながら、今一層の生徒の未来の幸福につながってゆく生徒指導を、そして問題生徒皆無の方向に精進してゆきたい気持で一杯です。

第14回 全国バス学習研究集会 (13分科会)

障害をのりこえ社会に適應できる人間の育成をめざして
— 生き生きと活動させる指導を —

愛知県春日井市立勝川小学校

岩 田 鎮 人

1. 研究主題とその問題提起

心身に障害をもつ児童生徒が社会に自立していくために問題として挙げられることは ①個性に乏しい。②無気力でいつもぼんやりしている。③意欲に欠け消極的である。④仕事や学習がのろい。⑤集団生活をする能力に乏しい。⑥劣等感に抑圧されカラトとじこもっている。

こうした無気力で意欲に乏しい彼等を社会に適應させ生きるたくましさをもたせるには

- ① 自己存在の意識をもたせること。
- ② 学習や仕事によるこびを持たせること。
- ③ 自分も活動しなければ過ぎていかないと感じさせること。
- ④ 自分にもできる仕事があるという自信を持たせること。

2. 生き生きと学習させるための方法とその実践

(1) 活気を作るための体育授業の重視

- ① 走れ！走れ！(徒競走 長距離走)
- ② おしくらまんじゅう
- ③ 変形ドッジボール

(2) 一人一人を生かす学級経営

① 一人一役の係活動

自分がいないと学級がまわっていかない 自分は学級に重要な人間だ 自分だけのかの役に立っているという意識

②ギリギリの緊張場面をつくる短答活の活用

- ・漢字テスト等
- ・合格しないと帰れない。

③自信とファイトをつくる大出表

(3) 学習の効果をたかめるために

① 宿題の効用 "〇をつけるよろこび"

② テストの効用 "かならず100点をとる"

③ 理論より"リルテ" 珠算指導

(4) 人間関係を豊かにする小集団学習の活用

① 聞け/教えよ/ 自分が高まるよろこび" 教えるよろこび"

② 流れ作業 熟練者の養成 ぼんやりしていることが許されない
能力にあった仕事 生産のよろこび"

(5) 遊びの指導

- ・ 社会生活をして上に遊びは重要な意味をもつ。
- ・ 夢中になれる遊び(趣味)を作ってやること。

<付> 中学 1年 6名 2年 7名 3年 2名 計 15名

IQ 平均 58 最高 85 最低 28

重複障害 手足不自由 2 言語障害 1 弱視 1

第14回 全国バス学習研究集会

障害をのりこえ 社会に適応できる人間の育成

姫路市立城南小学校

橋本ゆみ子

< 研究主題とその要旨 >

本校障害児学級に在籍する児童は、何等かの障害あるいは障害らしきものを持っているところに健常児との違いがあり、そこに教育的な特別な手だてが必要である。障害は個々人により、その現われ方が違っており、その程度も症状も特性も様々である。この児童の持っている障害のほとんどは今日の進歩した医学をもってしても治癒することが少なく、結局は、生涯その障害を背負って生きていかなければならないであろうと考えられる。また、障害をもったが故に、社会からの偏見や蔑視の冷たい眼差しを受けないとは言いきれない立場に立っている児童である。

これらの児童を立派な人間に育てあげるためには教育に期待されるところが大きい。障害を背負いながらも、それに負けることなく、個人の能力を最大限に伸ばし、自分で生活を切り開いていく、心身ともにたくましい人間を育てなければならない。

< 研究内容 >

1. 障害児と共に学び、共にたかまる集団の育成をめざして

本校には、精薄学級1、言語障害学級2、難聴学級3の計6の障害児学級があり、それぞれの障害児の実態に合わせて交流を行っている。交流を行うことにより、障害児は、普通児の集団へ参加し、幅広いコミュニケーションの態度や能力、そして社会性を身につけ豊かな人間性を養い、健常児には、障害児とコミュニケーションする日々の生活を通して、彼等自身のコミュニケーションの能力、また、障害児への協力体制を通して深い理解に根ざした人間愛を育てていくことをねらいとしている。

(1) 交流学習の形態

精薄学級・難聴学級の児童は、図工・体育・音楽・家庭・学校行事を該当学年の固定の学級にはいり、委員会・クラブの各活動は、それぞれの児童の希望の活動を健全児と共に行っている。

言語障害学級の児童は、市内の居住地の学校で各児の該当する学年の普通学級で授業を受け、週に1~2回、時間を決めて通級し言語学習をしている。

(2) 交流学習の実践の中から

・健全児の態度

低学年では、連絡係や世話係になることを好み、何もかも世話をやきたいという態度で係活動をしている反面、学習時は同じ立場の友達として対等に接している。高学年になるにつれて「してあげねばならない」(対精薄児)「出来るくせに、自分でやれ」(対難聴児)という態度も出てきているようである。

・障害児の態度

交流学級の友達にさそってもらった、いっしょに出来た、負けずに出来たという喜びにあふれ、生き生きとして活動している反面、「わからないんだ」「出来ないんだ」「してくれるんだ」という気持ちも所々に現れることがある。

・交流学級の担任から

時々しかやって来ないので児童の実態がつかみにくい。同種の障害でもその程度が様々であるので、具体的な計画が立ちにくい。児童によっては教科内容に無理な点もあるので考慮する必要がある。

(3) 問題点

- ・難聴学級:複式授業解消の意味もあるので児童の実態に応じた交流の形態がとり難く、交流学習の方向を考慮しているのが現状である。
- ・精薄学級:児童の学年の幅が広く、交流の時間帯がばらばらで、学習の指導時間帯が継続して取り難く、児童の学習意欲の高まりが不足しがちである。
- ・言語学級:とくに校外通級の場合、通常の学級担任との連携が不足するため通常の生活場面での実態把握や指導の配慮が十分出来にくい。

2. 意欲的な学習態度をわがして(Y児) — 3・4年難聴学級での取り組み —

難聴学級においては、教育的医学的立場から配属された施設・教具によって聴力を補い、正しい音声を聴取させ正しい発音発語をさせ、学習意欲を助長し能力に応じた学力と明るい生活態度を養い、また、残存聴力の活用と聴能訓練・言語訓練を個別にあるいは教科指導の中で各児童の発達段階に応じて重点的に取り組み、言語性を豊かにすることをねらいとしている。

(1) 指導の形態

複式授業の形態で、各学年相当の教科書を使用し、国語・算数・社会・理科・道徳(同知)・学級会・給食・特設バスなどの教科学習や諸活動を行っている。

(2) 学級の実態

3年-女2名, 4年-男2名・女3名の計7名。平均聴力損失は、61~70dB 2名, 81~90dB 4名, 120dB 1名である。

実践例 (3年Y児 女 S43・6・16生)

① 実態

・生育歴

- ・家族…父(42才)・母(34才)本人
- ・出生時体重3020g、発育は悪かった。
- ・口蓋裂・ボタロ氏管閉存症…手術済

・本児のようす

- ・聴力損失 右60dB, 左75dB (S54.5)
- ・社会成熟度診断検査 社会成熟年令5才4か月 (S54.9)
- ・聾学校で1年生程度の学習をしている。4月当初、表情が乏しく、こちらからの話しかけにはほとんど反応しなかった。話すときは、口をあけるだけで無声であった。

・教育歴

- ・姫路聾学校幼稚部(1年)
- ・姫路聾学校小学部(1年~3年)
- ・本年4月本学級3年に編入

② 実践の概況

・声を出して自分から話せるように

- ・遊びのなかま入りができるようにまわりの子が誘ってやる。(自分からは入れない)

- ・学習時の発表、当番の仕事（忘れ物調べ、給食のあいさつ等）など人前で話す機会を多くし、声を出して話す必要を感じ取らせる。
- ・その場その場で話し方・答え方を教え、声を出して話す経験をできるだけ多くさせる。
- ・依頼心が強く自主性に乏しいので、意欲的に取り組める場面を設定するように

- ・学校では、係活動（学習・給食・清掃・当番など）をどんどんさせ、経験をふやす。日常生活の、電気をつける・消す、窓をあける・しめる、戸のきぎをかける、えんぴつをけずる、補聴器の電池を点検するなど、最初はぎこちない動作であったが、今ではだいぶ慣れてきている。
- ・家庭に連絡して、母親の送り迎え（バス通学）を5月初めでやめる。登校の準備を自分でする。
- ・家庭での様子（主に話したことば）を毎日ノートに書いてもらい、また学校での様子を連絡することで、できるようになったことを的確につかむ。
- ・コミュニケーション能力を高めるために
 - ・交流学級で健常児に交って学習したり活動したりすることは、Y児にははじめての経験で、最初は表情も固かったが、親身になって世話をしてくれる健常児に、このごろでは笑顔を見せるようになってきている。
 - ・健常児のことばがはいる環境に入ったので（本児の聴力から考えても）ことばの発達により影響を与え、理解語がふえてきている。

3 問題提起

- (1) 学校全体が、障害児に対してより正しい理解のための努力を、より充分に行うための取り組みは、どうあるべきか。
- (2) 聴力損失の重度化に伴い、言語力のついていない児童が多く入級しているが言語力をどのようにつけていけばいいのか。
- (3) 重複障害を持つ児童に、基礎学力をつけ、言語力を伸ばすにはどうすればいいか。